

## 論文

# 日本事情の教育ドメインをどうデザインするべきか (その1)

柳 川 高 行

Article

For a Better Educational Domain Designing of *Nihonjijo* (No.1)

Takayuki Yanagawa

## 目 次

1. はじめに .....	101
——今なぜ日本事情のカリキュラムデザインなのか——	
(1) 日本事情のゲスト・スピーカー体験	
(2) 短大在職時の日本語教育体験	
(3) 心ない発言	
2. 教育戦略と教育ドメインのデザイン .....	106
2-1 教育ドメインデザインの必要性 .....	106
2-2 教育ドメインデザインの可能性 .....	111
2-2-1 Contingency Lecturing .....	111
2-2-2 日本事情は日本語教育とは異なる .....	112
2-2-3 日本事情の教育ドメインと教育目標 .....	113
3. 柳川による日本事情教育の実践 .....	116
3-1 日本事情のカリキュラムデザインと学生消費者調査 .....	116
3-2 講義内容——教案の実際—— .....	123

第1講	童話を読んで表現しよう（その1）	123
	——『泣いた赤鬼』を読む——	
第2講	童話を読んで表現しよう（その2）	124
	——『小さな1』を読む——	
第3講	詩を読んで表現しよう	124
	——金子みすゞ「わたしと小鳥とすずと」を読む——	
第4講	受験戦争を科学する	125
補論	受験戦争はどうなるか、大学4年間で何を学んだか ——入試偏差値から卒業時の学習成果が問われる 時代へ——	
第5講	配偶者選択競争を科学する	126
第6講	定年後の再就職戦争を科学する	127
第7講	激しい受験地獄と勉強しない大学生	133
	——アマン先生へのお答え—— —— entrance-examination hell and idle university students ——	
補論	大学改革私案	
第8講	なぜ日本の家庭は子供中心なのか	149
	—— children-centered family in Japan ——	
第9講	日本の週刊誌文化について	155
	—— weekly magazine culture in Japan ——	
第10講	日本語の話し言葉としての特質と赤ちょうちんとの 関係について	159
3-3	『泣いた赤鬼』をどう読むか	165
4.	結びに代えて	177
	——日本事情教育・研究のイノベーションを目指して——	

## 1. はじめに

### ——今なぜ日本事情のカリキュラムデザインなのか——

筆者は経営学と商業学とを専攻している人間であって、留学生に対する日本語教育や日本事情を「正規科目」として、大学（含む短大）で教えた経験は全く無いのにも拘わらず、1998（平成10）年度9月から勤務先の大学において、「日本事情Ⅰ（経済と社会）半期2単位」を担当することを余儀（?）無くされた。なぜ私が日本事情Ⅰを担当するに至ったのか、その経緯は後で詳述することとしたいが、私は97年10月から、「留学生教育」、「留学生向け日本語教育」、「日本事情」に関する著書や論文、資料類を、教務部長諸星ノリ子氏及び図書館の方々の協力（特に穴戸藤重事務長、菅野善子さん、そして直接収集作業に携わって下さった篠崎京子さんのご協力は大変有難いものであった）の下に集め、少しずつ読み進む作業を続け、担当予定の日本事情の教育サービス・ドメインのデザイン（いわゆるカリキュラムデザイン）作業を行ってきた。それは、①一般的日本人学生とは異なったレベルの「日本語能力」と「日本社会に関する知識」を有している留学生を聴き手に設定し、②彼ら・彼女らの学習ニーズに対応した「教材」を作成し、③彼らが十分に理解可能な話として教授者が教室で「伝達する」ことを意味しており、**教材作成能力と、コミュニケーション能力が同時に発揮されること必要不可欠である。**それは「興味深い知的な話」を留学生が「聞いて分かる日本語」によって組み立てていく教育サービスメニューの「**研究開発（research and development, R&D）**」に他ならない。経営学なかでも経営戦略論を専攻する私は、製造業における「製品ドメイン・デザイン」や、流通業や外食業における「ストアドメイン・デザイン」の多数の実証的分析を行ってきたし今後も行なっていくつもりである<sup>（注1）</sup><sup>（注2）</sup>。具体的な企業のケース・スタディを講義で取り上げるのは、何よりも経営学の理論や概念を「**現実分析と現実形成とに応用する**」ことができなければ、理論や概念の学習は殆ど何の意味も持たなく、記憶力の代理変数になるかせいぜいのところ単位認定試験の答案を書くことに役立つ程度に過ぎないと私は考えているからである。

「実践的応用科学としての経営学」を筆者はプロとして教育研究していることに加え、現実分析への理論の応用能力の重要性を常日頃学生諸君に繰り返し話している私が、日本事情という「新規事業 (new business)」において、留学生諸君にとって「聴いて価値のある」講義メニューの開発がもしできないとしたら、私の経営学研究は実践的有用性の全く無い「偽物」、「まがい物」と言われても甘受せざるをえないであろう。そのような意味において、「日本事情の教育サービスドメインのデザイン」がきちんとできるかどうかは、私の「経営学者としての力量」を試すリトマス試験紙なのである。私は失敗に臆すること無く、教育者として、22年前の初心に立ち帰り、持てる力の全てを投入して98年の春休みから構想を練り夏休みに2週間程の時間をかけて「講義の全体目次」と1回毎の「講義プラン」——キーワードと全体の論述の流れの構成——の作成を行なった。

以下に於て、私の日本事情Ⅰの①全体プラン、②数回分の講義の一部、③学生の意見と感想の一部、④学生の意見に対する柳川のコメントの一部とを、講義の生起の順番に掲載することとしたい。

本論文をお読み下さった、日本事情を専攻されている方々、大学・短大等で日本事情の講義を担当している方々、及び留学生教育に関心をお持ちの方々の忌憚のないご批判やご高見をお寄せ頂ければ大変嬉しく思う次第である。

私が、日本事情という科目を担当するに至った経緯（それは同時に留学生教育への私のコミットメントの理由でもあるが）としては、大きく3つの契機を挙げることができる。

### (1) 日本事情のゲスト・スピーカー体験

その第一の直接的契機は、同僚の中谷陽子法学部教授が1997年度から担当しておられた「日本事情」の講座において、筆者が97年11月11日と18日の2回ゲストスピーカーとして①日本社会の特質——学歴社会と学習塾——、②日本の繁栄と日本型経営、というテーマで話したことである。これは中谷教授の側から筆者に対して依頼があったからではなく、新しい科目を担当され

て、さぞ四苦八苦されているのではないかと筆者が勝手に忖度（そんたく）して（日本社会の特質のひとつは「忖度社会（considering society）」という特色であり、それは企業や官庁を始め大学も含めての全ての組織体の人間関係の中に見出しうるものであると私は思う）中谷教授にお手伝い（大学内ボランティア活動）を申し出て、恐らく手伝いたがっている筆者の気持を尊重されて、内心で「何とお節介な奴か」と微笑されながらお許し頂けたのだと私は思っている。夏休みの間にいくつかの話を準備して行なったが、日本事情という科目でメインに取り上げられている、日本人論や日本文化論という枠内の議論とは別に、第二次対戦後の日本社会を世界でもトップ・レベルの「物質的に豊かな社会（commodity exploding society）」へと成長進化させてきた原動力として2つの価値観である「教育最優先主義（education priority-ism）」と「会社人間志向（company-first employee orientation）」とを、筆者の関心との関係もあって話してみた。

この機会にと思い講義の後で学習上と生活上とで困っていることは何かと聞いてみた。彼ら・彼女らの悩みは、①留学生対象の日本語は、ある留学生にとっては易し過ぎ、他の留学生にとっては難し過ぎること、②英語の1年次必修科目が全般的に難し過ぎること、③1年次必修の5つの専門科目の日本語の説明がよく分からないこと、④彼らの生活上、学習上の悩みを大学のどこの誰に相談していいのかわからないという4点に大きく集約できた。

## （2）短大在職時の日本語教育体験

筆者に日本事情という科目、引いては留学生教育に関心を持たせた間接的契機のひとつは、20年近くも昔に筆者がまだ白鷗女子短大の助手をしていた時に、フィリピンからの2人の留学生、翌年にはオーストラリアからの1人の留学生に日本語を教える手伝いをした経験である。当時は留学生という制度が存在していなかったので、短大に受け入れるシステムそのものが無く、彼女達は英会話の授業に出席する以外は、事務局のお嬢さんや高校の先生そして筆者の日本語のクラスのみが勉強の主内容であり、「あいうえお」から

の初歩的教育が必要であった。正規カリキュラム外の日本語の授業を週2コマか3コマ筆者が担当した。手に入る外国人向け日本語教育の本を東京の書店まで買いに出かけ、俄か勉強をしたが、「間に合わせ教師」の能力の著しい不足の悲しさに加え、週12コマの授業を抱えていた筆者は十分な準備の余裕も無く、「何故この私が日本語教育を」という思いと、「まともに日本語を教えることができない罪悪感」とに責められ、教える私自身にとっても決して幸福なことではないばかりか、留学生自身にとっても幸福な状況とはほど遠いと感じられた。白鷗大学には「制度としての留学生受け入れ」が存在しているが、当時と比べ**留学生を巡る状況**は大きく改善されてきたのだろうかという思いを心の片隅に常感じて今日に至っていたが、先述したようにいろいろと話を聞いてみると留学生を巡る大学の環境は、殆どと言っていいくらい改善はされていなかった。白鷗大学の留学生への対応は制度としてきちんと整備されるべきだ、という思いを強く感じるとともに、20年前の「**心の負債**」をいつか返さなくてはと思い続けていた私にとって、引き受け手がいなければ自分が引き受けようと思うことは、私の心の中では無理のない考えであったとすることができる。

### (3) 心ない発言

留学生に対する教育に対して筆者が積極的に関与（コミットメント）しなくてはいけないと思うようになった直接的契機でかつ最大の要因は、1997年5月7日の平成9年度第2回教務委員会における2人の委員の発言であった。当日の会議では、①本年度の教務委員会の8項目のアクションプランの策定と②各アクションプランの担当ワーキング・グループのメンバーの選定、とが委員長によってなされた。そのワーキング・グループのひとつに「編入生・留学生・社会人への対応」WGがあり、3名の委員が担当となった。経営学部メンバーの1人から、「何か問題があるのですか。何か問題があるという話を私は全く聞いていない（だから何をする必要はない）。」という主旨の発言があり、経営学部のもうひとりのメンバーからは、留学生を侮辱する

実に心ない発言がなされた。このWGはその後1年間全く活動しなかった。筆者である私は「教育制度の一環として」留学生や社会人を受け入れている大学の専任教員の口から堂々とこのような発言がなされたことに関しては、常日頃の言動や教育活動から「さもありなん」と思い余り驚かなかったが、委員という職務に就き、毎月委員会手当を受けとり、ワーキンググループのメンバーを受諾しておきながら、「何もせずに」恬として恥じない態度は私の理解の範囲を越えていた。

その発言後も事態は何ら動かず私は見るに見かねて越権行為であることは十二分に承知しながらも、10月29日の教務委員会に「**留学生に対する教育的ケアの必要性和その内容についての提案**」を提出した。

その後教務委員長と、柿沼事務局長、諸星教務部長、原田教授と英語担当者の方々との議論と協力とを踏まえて、①「日本語」科目の専門担当者の確保と講義科目数の増加（従来の倍増）と、②「日本事情」の開設数の増加（従来の3倍）、③英語Ⅰに留学生を中心として「基礎クラス」を新設し、98年度から実施されることが決まった。「言い出しっぺ」の一人として私は、中々引き受け手のいない（それは科目内容の新規性に加え持ちコマの関係からも難しかったのだが）「日本事情Ⅰ」を引き受けることは、極めて「自然な流れ」であった。

以下の第一稿に於ては（この論文は数回に渡り断続的に書き継いでいく予定である）、筆者が収集し、読了し、メモを作った文献資料に基づいた、次の各項目は紙幅の関係上割愛してある。いずれも将来詳細に検討していく予定である。

- ① 留学生10万人計画と日本社会の留学生受入れ状況の調査
- ② 栃木県に於ける留学生受入れ状況と受け入れに関連する諸制度の調査
- ③ 白鷗大学に於けるこれまでの留学生受け入れ状況の調査
- ④ 留学生の生活事情と学習状況調査（白鷗大学への留学生へのアンケートとヒアリング調査を含む）

⑤ 各大学に於ける日本事情の講義に関する調査（ヒアリングと学生便覧の収集）

⑥ 日本事情についての先行研究の分析とまとめ

以下に展開する論述は、1999年5月7日までに筆者によって行なわれた主に98年度の講義に基づいている。とにかく初めての留学生向けの講義体験であるから、長年に渡って留学生教育に携わってこられた経験豊かな先輩の方々の目から見ると、実に頼りなく欠点ばかりが目立つと思うけれども、今後とも一回一回の講義の終了後にその日の学生のレポートを読み、テープ録音した自分の講義を聞き直してメモを作り incremental な改善を積み重ねていくという「1人QCサークル活動（one-man lecture quality management）」を行なっていきたい。この論文をお読み下さった日本事情教育に携わっておられる方々からの貴重なご意見を是非賜りたいと希っておりますので、是非ご高評を頂きたくここに改めてお願い申し上げる次第です。私は自分の教育者としての体験から、自分一人で講義の plan-do-see を行なう single loop 学習に加え、学生の反応をフィードバックしていく double loop 学習を行なうことがより効果的であり、さらにベテランの第三者からの批判とアドバイスとを頂いて講義の質を改善していく triple loop 学習が学生満足度を高めていく best practice であることを確信している。inner check と outer check の併存がより良い講義を行なう為の必要十分条件だと私は思う。

## 2. 教育戦略と教育ドメインのデザイン

### 2-1 教育ドメインデザインの必要性

大学における半期15回あるいは通年30回の講義（日本事情も含めて）の全てに関して、1日1回の講義に、明確な「講義目標（lecturing goal）」が存在し、その講義目標に沿った「話の組み立て（story structure）」がなされ、1回の講義を構成する話のひとつひとつのまとめ（トピック）ごとに



「時間配分（time allocation）」が行なわれ、1回の講義ごとに「講義計画（lecturing plan）」が作られることは、良い講義を行なう為の不可欠の前提条件であろう（図2-1参照）。講義計画を作り、その plan に沿って実際に講義を行ない（do）、終了後に講義を振り返って改善点を発見し講義ノートを修正する（see）という plan-do-see の cycle を廻し続けることは「講義のマネジメント」の基本中の基本であろう。

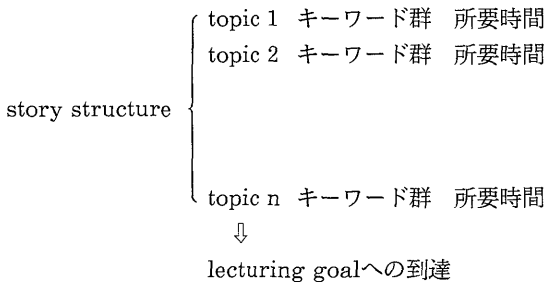


図2-1 lecturing plan の概念図

私は恩師の藻利重隆先生から「柳川君、大学教師は1科目の講義で1年に3回は勉強しなければならないよ。まず十分に予習をする。次に講義しながら考える。話をしていて話がうまく流れない所は考え方がまだ不十分な所だから、話のどこがそうなのかを見極めることが大切だ。そして講義終了後にノートを作り直す、これを毎年繰り返していくといい教師になれるよ。僕はずっとそれを続けてきた。」というアドバイスを頂いた日のことを昨日のようによく覚えている。学部4年生のゼミ終了後に国立駅まで藻利先生をお送りする途中で先生はさりげなく話して下さった（この大学から国立駅までの間に伺ったいくつかの話は、私の生涯忘れえぬ貴重なアドバイスである）。私はこの藻利先生流の「講義のマネジメント」を初めて教壇に立った日から今日まで実践してきていて、先生のアドバイスの適切さを身をもって体験してきた。

だが私はある時期から、1回1回の lecture plan をきちんと作ることの

**重要性**に改めて気付き、教案をきちんと準備してから教室に行くようになった。短大に助手として奉職した私は、短大に経営科の開設された1980年の4月以前の2年半は、英語科と幼児教育科のお手伝い（主に英語）をしていた。最年少の私には、英語科で教員免許状を取得しようとしている学生の実習校（中学校）を訪問し学生の研究授業に立ち会うという仕事の殆ど（栃木県内以外の殆どの中学校）が廻されてきた。誠に恥ずかしい話ではあるが、私は1回の英語の授業毎にきちんとした「**教案**」が作られ、その「**台本通り**」に授業が効果的に展開されているという事実を、この実習校訪問時に初めて知ったのである。講義の plan と do を、教材の適切な選択と配列を行ない time schedule 通りに教室で展開するという、「**極めて当たり前**」のことは、私にとり「**新鮮かつ衝撃的**」であった。この点に関しては、中学校の先生の方が我々大学教師よりもずっと進んでいたし今でもそうだと思う。私は教育実習校訪問後見よう見真似で教案を作るようになり、少しずつ修正して今日の教案作りの私なりのシステムができ上がってきた。

このような1回1回の講義の適切化、これを講義の「**部分最適化**」と名付けると、他方において、1回1回の講義を関連づけて、講義全体を共通の視点からまとめ上げ構造化していく枠組みが、講義全体を適切化し、「**全体最適化**」を図る為に必要不可欠となるであろう。講義全体の全体最適化をデザインする作業と、デザインされたものが筆者の造語である「**教育ドメインのデザイン**」に他ならない。教育ドメインのデザイン作業は、次の3次元によって構成される。

第一に「**受講生の特性の設定 (core audience characteristics)**」が適切になされなければならない。受講生の理解可能な**言語レベル**——語い力、耳で聞いて分かる日本語の受信能力——と、**知識、一般常識と経験の内容**とが、どんな言葉を使い、どこまで「**ことば的説明**」を行ない、何を具体例として用いるのかを規定するであろう。日本事情においては、入学前のキャリアが、日本人学生と比べて異質かつ多様であり、日本語能力も不十分である場合が多いので、この受講生の特性の認識は大変重要であると思われる。

第二に「受講生の学習ニーズに適合した講義全体の到達目標の明確化（audience's needs と educational goal のmatching）」がデザインされなければならない。これは科目特性から生じる教えなければならない「基幹的内容（must content）」と、「学生の希望する内容（want content）」と、「教授者の個人的に話しておきたいこと（individual content）」の複合物であるが<sup>（注3）</sup>、この講義の共通テーマの設定には、教授者の「感受性」と「社会的関心」と「革新性」が表出されることになる。最も能率的かつリスクが少ないのは、多くの大学で多かれ少なかれ一般的に取り上げられている内容を寄せ集めたことを話すことである。これは教授者にとり最もやり易く、一応講義の体をなすので極めて魅力的な方法であるが、必ずしも学生にとり興味深く分かり易い話にはならない場合が多いことと、教育内容を自分で創造可能であるという大学教師の「特権」の放棄であること、そして自分が話したいテーマを自己選択する方が講義者の講義意欲がはるかに高まるという3つの理由から私は、「柳川固有のテーマ」選定にこれまでこだわってきたし、日本事情においても、こだわっていきたい。率直に語ることを許して頂くならば、当該科目の先行教授者達の教育業績をパッチワークして作られる教育ドメインは、「模倣されたもの」のであって「デザインとはほど遠い」と言わなければならないであろう。

第三に講義の全体的テーマに沿って、1回1回の講義の教材を書き下ろすことと、教材を分かり易く受講生に説明していくことをその内容とする「卓越した教育能力（excellent educating ability）」が教授者に備わっているかどうか教育ドメインデザインの3つ目の次元である。教育能力の中身は、①「教材作成能力（lecturing material making ability）」、②分かり易い「教材説明能力（explanating ability）」の2つである。重要なのは、第一に、新しい教材を継続的に生産していくことを可能にする「教材作成方法」を自分のものとしているかどうかであり、第二に、受講生に分かり易い話し方へと次第にコミュニケーション能力を高めていく「コミュニケーション改善方法」の自分なりの方法を持っていることである。

これまで述べてきた日本事情Ⅰの「教育ドメイン・デザイン」の概念図は、次図2－2の通りである。

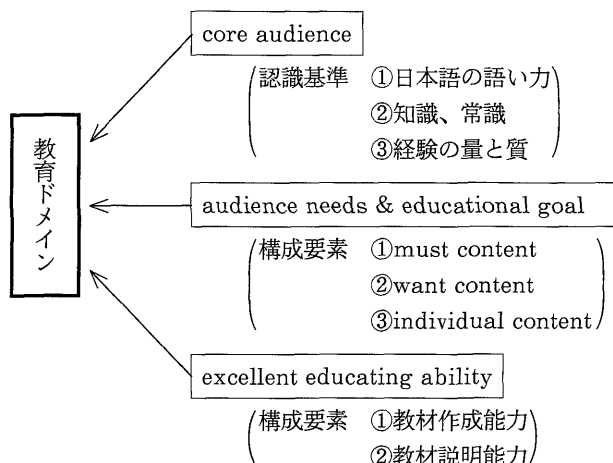


図2－2 日本事情の教育ドメイン・デザインの概念図

教育活動という営みは、長年経験して自然と上手くなっていく程、単純でも甘いものでもない。コンピューターをワープロとして使うという技術的な skill が、学習時間に正比例して単純に増加していくことに比べ、教育活動とは実に複雑かつ多様な skill の組み合わせに依存している。教育能力とは、多様かつ高いレベルの「能力の束」に他ならない。自分の教育ドメインを「意識的にデザインし直すこと」を繰り返しながら、教材作成能力を不断に高める努力を重ね、コミュニケーション能力を改善していくことを積み重ねていって初めて、良き教師へと「自分育て」が可能となるのである。教材作成の自分なりのやり方とコミュニケーション能力改善の自分なりのやり方とを創意工夫することが、良き教師となる王道であろう。努力することを怠り、学習の方法論も持とうとはせず、ただ惰性で教壇に立ち続けている教師達に、私や私の妻を含めて多くの人々が自らの学校生活の中で出会ってきたはずで

ある。僅か5年間程の期間であっても、「**教育ドメインの意識的デザイン**」を実行し続けた教師と、「**デザインレス**」教師との間には、決して越えることのできない「**教育能力のギャップ**」が生じてくると、私は自分の学生としての経験と観察と、教師になってからの経験と観察を通して、はっきりと明言できる。これまでの論述から、「教育ドメインの意識的デザイン」は、良い教育を行なう上での必要不可欠の前提条件であることを納得して頂けたと思う。

## 2-2 教育ドメインデザインの可能性

前節に於いて「教育ドメインデザインの必要性」を論じてきたが、必要性の認識は、その教育ドメインを現実的にデザインしていく能力を欠いては、全く無意味である。必要性と可能性が手に手を取って歩むとき、教育ドメインデザインと実践が現実になされることとなる。本節では、柳川による**教育ドメインデザインの実践**を詳細に語ることとしよう。

### 2-2-1 Contingency Lecturing

良い教育とは、一義的・絶対的に存在するのではなく、受講生に最もマッチしたテーマとコミュニケーション方法によって決定されるという意味で、「**受講生依存的**」な「**状況適合的教育 (contingency lecturing)**」であるというのが、女子短大の幼児教育科その他で英語を教えていた時の私の基本的立場であった。

contingency lecturing とは、第1に「**学生志向 (student oriented)**」であり、第2に「**専門志向 (profession oriented)**」をその内容としている。当時私は、女子短大の幼児教育科、英語科、経営科という性格を大きく異にする3つの学科で一般教養の英語を教えていた。その時私は、幼児教育科では絵本を、英語科では易しくリライトされたシェイクスピアの作品を、経営科では易しいビジネス記事を取り上げた。専門志向とはそのような**教材のジャンル選択基準**を表わす言葉である。それが学生の学習意欲を引き出す最良の方法だと当時は考えていたが、現在は各科共通にPeter Rabbit を読ん

でも取り上げ方を変えれば可能であったと考えが少し変化している。教材をその学科に合わせて別々に料理する方法を取れると今は考えているからである。例えばユーミンの音楽は、音楽や詩学や社会学や経営学でそれぞれ違った角度から光を当てられることとよく似た関係にある。端的に言えば、contingency lecturing で重要なのは student oriented の方であって、profession oriented ではないと今は考えている。どんな専門に関連した教材であっても、それを**学生の理解力に適合的な「コミュニケーション方法」**で伝達し、納得して理解させていくことが教育活動の本質だからである。幼児教育科の学生の英語力レベルと英語科の学生のそれとは大きく異なる。それに配慮した英語の語いレベルや文法レベルが教室で提供される必要がある。

「日本事情Ⅰ」に於ては、日本語を外国語として学習してきている留学生が対象であることから、student oriented な講義である必要性がある。教室で使用する言語は、事前に「**入念に吟味される**」必要性が大きい。教室で使用する言語とそれらの言葉をどの程度説明を加えながら用いていくのかという柳川の「**情報発信 (encoding)**」は、学生達の「**情報受信 (decoding)**」能力を十分に把握しておくことを不可欠の前提条件としている。「**留学生の日本語能力を測定する調査**」が講義に先立って行なわれる必要性があることは誰にとっても自明であろう。

私は、留学生達の入学願書の情報、入試における日本語試験の得点等を事前にチェックすることに加え、私の作った試験を課すこととして、問題を8月1日に作成した。そのデータを入手前に教案を書く必要性があったので、私は**我が家の小学3年生を聞き手の代表例**と考えて教案を作った。それは実際の講義の中で、大幅に修正することを前提とした教案であることを予め明示しておくこととしたい。教案は学生との教室のやり取りの中でより適切なものへと絶えず改善を試みられる対象物である。

## 2-2-2 日本事情は日本語教育とは異なる

日本語教育は、留学生が日本語で行なわれる大学教育——一般教育科目と専門科目教育とゼミナール教育——を十分に理解する為の「**道具の使い方**」

に習熟させることを目的としている、と考えられる。それは「日本語教育専門家」によって為されることが一般的であるが、「学部専門科目担当者」によって専門科目の理解に必要な「基礎専門語」の教育が為されることもありうる。本学に於ける日本語教育は、前者のやり方で行なわれている。それに対し、日本事情とは、道具としての日本語をコミュニケーションツールとして行なわれる「**日本社会の歴史、社会、自然、文化の教育**」であると私は考えているし、本学に於ける日本事情もそのような理念に基づいて設置されていると言うことができる（注4）（注5）。

### 2-2-3 日本事情の教育ドメインと教育目標

私の構想している柳川流の「日本事情Ⅰ」の教育目標は大きく分けて2つある。

第一の教育目標は、学生との良好な人間関係を形成し、学習への強いモチベーションを与え、**授業へ学生を積極的に参加させること**である。その為に、「**童話や詩と一緒に読むこと**」を通して、学生と柳川との間に「**信頼関係に満ちた人間関係**」を形成し、「自由に発言できる雰囲気」の中で、「**学生からの活発な発言**」がなされるように教室をマネジメントする。授業以前の「**コミュニケーション環境の形成**」が第一の目標である。このようなコミュニケーションの土台作りと、学習へのモチベーションを高めることとは、往々にして、「余りに当たり前である」として軽視されることが多いが、少人数の教室で、1人1人の学生の顔と名前が教員によって認知され、良い雰囲気が漂い、相互に好意を感じ合うことは、良いコミュニケーション空間が存在する為の基礎的条件であることを忘れてはならない。

第二の教育目標は、「**授業内容形成**」の為の共通テーマを設定し、留学生に現代日本社会に共通に見い出される「**社会的に構造化された価値観と行動パターン（socially structured values and behavior patterns）**」という「**新しい文化**」を明示化し概念化する試みを行なうことである。従来の日本事情では、おじぎや、視線、ウチ・ソト意識、敬語、人間関係、年中行事といった、いわゆる「日本人論」や「日本文化論」で取り上げられてきた。そ

れらは「**伝統的**」文化であるとともに、多くの日本事情で取り上げられてきているという意味で「**普遍的**」文化だと言えよう。それに対し、柳川の取り上げる「**社会的に構造化された価値観と行動パターン**」は、「**現代的**」文化であると同時に、柳川の日本事情の講義に特有な「**仮説的**」文化である。なぜ私が「**伝説的**」で「**普遍的**」な日本文化を取り上げず、「**現代的**」で「**仮説的**」な日本文化を取り上げるのかと言えば、教育ドメインのイノベーティブなデザインをしたいという柳川の**パーソナリティー特性**が大きく作用していることに加え、現代日本社会の本質的な特質は、**伝統的・普遍的文化**の中ではなく、**現代的・仮説的文化**の中により明瞭に見い出されると私が確信しているからである。**伝統的・普遍的文化**を取り上げる方が、参考文献、資料が圧倒的に多いことから、日本事情担当者にとりほかに実行しやすいが、リスクを引き受け、失敗を怖れることなく新しい授業を創造することに取り組みたいと私は考えている。

社会的に構造化された価値観と行動パターンなどと言うと大層難しそうに聞こえるが、具体例によって、その意味することを語ろう。

日本社会は圧倒的多数が参加する受験競争社会として現象化しており、殆ど全ての青少年はこの受験行動に自己決定によって参加しているように見えるが、青少年達には受験競争に参加し勝ち抜くことが「**社会的に望ましく**」かつ「**見かえり**」も大きいという意味で「**経済合理性の高い**」行動であるという「**思考と行動の型**」が、「**社会的に共有**」され、それが受験競争への参加を「**社会的に動機付けている (socially motivate)**」のであると私には考えられる。社会的に共有されたある普遍的価値観によって、普遍的行動パターンが社会的に動機付けられていることが、「社会的に構造化されている」という言葉の第1の要件である。つまり、普遍的価値観という「**社会的動機付け要因 (socially motivating factor)**」がまず存在している必要がある。そして社会的動機付け要因そのものも、「**歴史的・社会的複合要因**」によって形成されてきていることが第1のポイントである。

「社会的に構造化されている」受験競争は、他方において、受験競争に親和的で支援的な社会的制度である、学習塾や予備校、通信添削事業や私立中



高一貫教育校などを生み出している。受験競争は、「補完的社会的支援制度（socially supporting institutions）」によって、一層強く「社会的に構造化される」のである。直接的な「社会的動機付け要因」に基づいて、ある社会的行動が生じると、その社会的行動を支援し、促進する複数の「支援的制度」が誕生してくるというのが、「社会的に構造化されている」という言葉の第2の意味である。「社会的に構造化された行動パターン」が生じる為には、第1に「社会的動機付け要因」という「普遍的価値観」がまず存在していることが必要であり、第2に「社会的に構造化された行動パターン」を強化し支援する複数の「社会的支援制度」が形成され一般化してくることが必要なのである。

以上のことを図示すれば、次図2-3のように描けると思う。

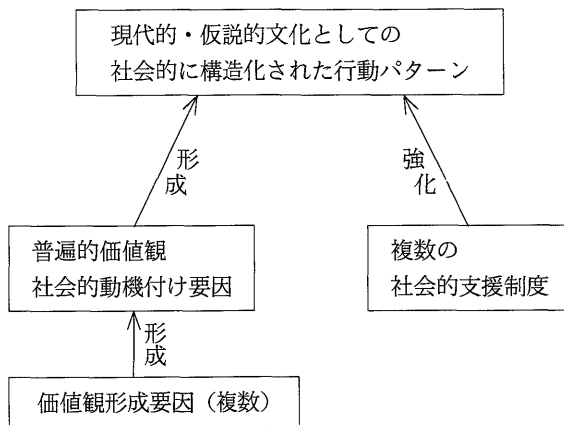


図2-3 現代的・仮説的日本人文化の形成と強化のメカニズム

社会的に構造化された価値観と行動パターンが見出しうる現象として、私は日本社会の5つの「社会的競争」を取り上げたい。社会的競争とは、人生に於ける生起順に示せば次の通りである。

- ①受験競争——有名大学への入学資格獲得競争——
- ②選職競争——いい会社争奪戦——

③配偶者選択競争——結婚難時代——

④企業内生き残り競争——リストラから身を守るには——

⑤定年後の再就職競争——高齢者はなぜ働かねばならないか——

しかしながら本年度98年度は、日本人学生に対する説明よりも2～3倍言葉を多くして丁寧に説明することが必要であるから、①受験戦争、③配偶者選択競争と、⑤定年後の再就職競争をそれぞれ3回ずつ取り上げる予定で教案を作成した。

教育目標の設定は、教育ドメインデザインの中核的内容を成す極めて重要なものであるが、それは同時に講義担当者に今後の①「学習の対象」と②「学習の範囲」と、③「学習の優先順位」とを明示する機能がある。①②③は現在の講義内容を規定すると同時に、将来の講義内容を規定していくことになる。教育活動には、目指すべき方向を示す羅針盤としての現在の「教育目標」と将来的な「教育ビジョン」とが不可欠なのである。goal-oriented education, vision-oriented education は教室の客観的要請でもある。

### 3. 柳川による日本事情教育の実践

以下に於いて、1998年度後期開講の「日本事情Ⅰ」に関して、筆者が初めて試みた留学生向けの講義の概要と1999年度前期に予定した講義の概要とを示すこととしたい。概要の内容は、①講義用教案と教材、②留学生の日本語による言語コミュニケーション能力を測定する事前調査の結果、③いくつかの講義の概要、④学生によるレポートの概要の一部、以上の4つである（第7～10講は1999年前期用に新しく書きおろしたものである）。

#### 3-1 日本事情のカリキュラムデザインと学生消費者調査

第1章と第2章で述べたように、日本事情に於ける講義というサービスのドメイン・デザインは、①受講者の特性、②講義全体の到達目標、③独自の教育能力の3次元によってデザインされる。②の講義全体の到達目標のデザ

インされた内容は、3 - 1の10回の教案に表出され明示化されている。①の受講生の特性とりわけ、その言語能力レベルを確認することは、③の教育能力の中の教材説明能力のレベルを調整しマッチングさせる為に不可欠の作業である。受講生の言語的理解能力と教授者の言語的説明能力との幸福な調和は、高い講義成果を上げる上で不可欠である。

98年9月21日の第1回目の授業時に、資料1の「日本語能力調査用紙」を配布して約40分間で解答してもらい、残りの時間で正解を学生に提示した。この調査用紙の利用目的は、筆者が教室で留学生に「口頭で」ひとまとまりの story を話していく時に、①どの程度の語いを用いて話せば耳で聞いて分かってもらえるのか、②難しい語いでも使う必要がある時に、その意味をどの程度の説明すれば分かってもらえるのか、について大体の目安を得ることにある。つまり筆者が教室で使うことが可能な語いグループ (useable words group) の大体の輪郭を掴み、授業の進行を円滑にすることを講義の一番最初に行なうことを目的にしこの調査はなされた。

この調査に参加した20名の留学生の点数一覧は、資料2の通りである。その結果から言えることは、次の5点である。

- ①57点満点で、平均点が38.3点で、100点満点に直すと、67.2点で、思ったより良くできたと思える。
- ②しかし個人間の点数のバラ付きは意外と大きくて、最高の51点から最低の8点では日本語の運用能力に大きな格差がある。8点の学生と25点の2人の留学生については、教員側からの個人的ケアが必要であると思われる。
- ③助詞の使い方と敬語の使い方に関する習熟度はまだまだ不十分だが、教室内での筆者による日本事情Ⅰの講義内容に関してのみ言えば、大きな問題とはならないと思われる。
- ④漢字の多様でかつ紛らわしい訓読みについては、学生間の知識のバラつきが大きいので、口答で話す時にその点の注意が重要であると思われる。
- ⑤漢字を読むことと、書くことは、64%と56%であるから、もう少し易し目の漢字を使用することが望ましいと思われる。

## 資料1 日 本 語 能 力 調 査 用 紙

学 籍 番 号 [ ]

(がくせきばんごう)

氏 名 [ ]

しめい (ふりがな)

問題1 次の日本語の文には誤(あやま)り・まちがいが1つ以上(いじょう)あります。正(ただ)しい文章に直(なお)しなさい。

- ①むかし、むかしあるところに、おじいさんとおばあさんは住(す)んでいました。おじいさんが山へしばかりに、おばあさんが川へせんたくにでかけました。

( )

- ②『お父さん、お母さんによろしく』と先生が申(もう)しておりました。

( )

- ③『佐藤さんに体を大事(だいじ)にして下さい』と母がおっしゃっていました。

( )

問題2 次（つぎ）の一線漢字（かんじ）の読（よ）み方（かた）をかきなさい。

（例） 帰る （かえる）

- |                                  |                          |
|----------------------------------|--------------------------|
| ①カヌーで川を <u>下</u> る。              | (                      ) |
| ②肉のねだんが <u>下</u> がる。             | (                      ) |
| ③ぶたいのまくが <u>下</u> りる。            | (                      ) |
| ④「暗い」の反対は「 <u>明</u> るい」。         | (                      ) |
| ⑤まもなく夜が <u>明</u> ける。             | (                      ) |
| ⑥だれが見ても <u>明</u> らかだ。            | (                      ) |
| ⑦たくましく <u>生</u> きる。              | (                      ) |
| ⑧子犬が <u>生</u> まれる。               | (                      ) |
| ⑨道ばたに草が <u>生</u> える。             | (                      ) |
| ⑩かぜでいきが <u>苦</u> しい。             | (                      ) |
| ⑪コーヒーが <u>苦</u> い。               | (                      ) |
| ⑫顔（かお）が <u>真</u> っ <u>青</u> になる。 | (                      ) |
| ⑬道（みち）で <u>転</u> んだ。             | (                      ) |
| ⑭ <u>童</u> 話を読んであげる。             | (                      ) |
| ⑮短（みじ）かい <u>物</u> 語を書く。          | (                      ) |
| ⑯えんぴつが <u>1</u> 本。               | (                      ) |
| ⑰えんぴつが <u>2</u> 本。               | (                      ) |
| ⑱えんぴつが <u>3</u> 本。               | (                      ) |

問題3 次(つぎ)の文(ぶん)の( )に正(ただ)しい送(おく)りがなを書きなさい。

(例) 読(ま)ない

- ①まちがったこたえは書( )ない。
- ②手紙を書( )たい。
- ③ノートに書( )た。
- ④知っている漢字を使って文を書( )う。
- ⑤思ったことを紙に書( )。
- ⑥辞書(じしょ)を引(ひ)けば正しく書( )る。

問題4 次に漢字の読(よ)み方(かた)を書きなさい。

(例) 単位認定 (たんいにんてい)

- ①赤字国債 ( )
- ②首相官邸 ( )
- ③景気回復 ( )
- ④金融問題 ( )
- ⑤経済再生 ( )
- ⑥政策提言 ( )
- ⑦国会運営 ( )
- ⑧恒久減税 ( )
- ⑨野党各党 ( )
- ⑩失業率 ( )
- ⑪写真 ( )
- ⑫様子 ( )
- ⑬反対 ( )
- ⑭練習帳 ( )
- ⑮洋服 ( )

問題5 次の漢字（かんじ）を書（か）きなさい。

（例） にほんじじょう （日本事情）

- |                 |   |   |
|-----------------|---|---|
| ①かぞくしゃかいがく      | （ | ） |
| ②しょうたいじょう       | （ | ） |
| ③むじんとう          | （ | ） |
| ④ちほうじち          | （ | ） |
| ⑤ざいせいいかく        | （ | ） |
| ⑥かんきゃく          | （ | ） |
| ⑦にゅうがくしきてん      | （ | ） |
| ⑧さいきんの出来事（できごと） | （ | ） |
| ⑨ゆうき（がわいてくる）    | （ | ） |
| ⑩びょうき（がなおる）     | （ | ） |
| ⑪もくてきち（につく）     | （ | ） |
| ⑫けんきゅう（ろんぶんをかく） | （ | ） |
| ⑬ちゅうい（して聞く）     | （ | ） |
| ⑭えきまえ（のスーパー）    | （ | ） |
| ⑮ま（ん）まる         | （ | ） |

問題6 私（わたし）はどのように日本語を学（まな）んできたのか、そして日本語学習において、最（もっと）も難（むずか）しいと感（かん）じたのは何（なん）だったか。自分（じぶん）の考（かんが）えをかきなさい。

## 資料2 学生の成績一覧リスト

学籍番号	問題 1 (3点)	問題 2 (18点)	問題 3 (6点)	問題 4 (15点)	問題 5 (15点)	総合計 (57点)	順位
——	0	14	6	13	15	48	4
——	1	15	6	14	11	47	7
——	1	16	6	13	14	50	2
——	3	15	6	14	15	51	1
——	1	18	6	12	11	48	4
——	0	10	4	10	9	33	14
——	0	4	3	1	0	8	20
——	2	13	6	8	12	41	10
——	1	10	5	11	10	37	11
——	2	14	6	12	13	47	7
——	0	9	5	9	8	31	16
——	3	13	6	10	10	42	9
——	1	17	6	11	13	48	4
——	1	10	6	7	7	31	16
——	0	9	5	5	6	25	19
——	2	16	6	11	14	49	3
——	2	10	6	10	7	35	12
——	0	11	4	8	11	34	13
——	3	10	5	7	8	33	14
——	1	12	6	5	4	28	18
平均点	1.2点	12.3点	5.45点	9.55点	9.9点	38.3点 [67.2%]	



### 3-2 講義内容——教案の実際——

以下において、一回ごとの教案の内容を示していくこととする。論述は、①講義タイトル、②講義エッセンス、③キーワード、④配布資料という順番で記していくこととしたい。1999年度用の第7～第10講に関しては、講義用原稿の全てを掲載しておくこととしたい。

教案第1講～第6講は、1998年夏休み中の8月1日から約1週間かけて作成した。98年の春休み中から折に触れて頭の中で、このような授業をしてみよう、こんなふうに教材を作ってみてはどうだろうか、あれこれとシュミレーションを重ねていたので沢山の教材の候補があったため、教案作成作業そのものは意外と簡単に済んだ。勿論初めての作成活動であるから、当然不十分かつ不適切な部分が散見されることは論を待たないが、今後の講義経験を糧に incremental innovation を積み重ねていきたい。

#### 第1講 童話を読んで表現しよう（その1）——『泣いた赤鬼』を読む——

##### ①講義エッセンス

『泣いた赤鬼』を読んで、学生に「なぜ赤鬼は泣いたのか」、「日本語のレポート」として提出してもらい、そのいくつかを学生に読み上げてもらい、柳川がコメントを述べる。城山三郎氏のエッセー「晴天の友」のコピー資料と、山口百恵のエッセー『蒼い時』の一節をコピーした資料とを配布し、「本当の友達」とは一体どんな友達なのかを学生達とディスカッションする。

##### ②キーワード

赤鬼（あかおに）、村人（むらびと）、青鬼（あおおに）、本当（ほんとう）の友達（ともだち）、晴天（せいてん）の友（とも）、a fair weather friend、雨（あめ）の日（ひ）の友（とも）、a rainy day's friend、誠実（せいじつ）さ、山口百恵（やまぐちももえ）、ビリー・ジョエル

## 第2講 童話を読んで表現しよう（その2）——『小さな1』を読む——

### ①講義エッセンス

『小さな1』を読んで、学生に「日本語の感想文」を書いてもらい、そのいくつかを学生に読み上げてもらい、柳川がコメントを述べる。『小さな1』という童話は1から10までの「数の勉強絵本」を超えた意味を持っているという話をする。それは $1+0$ は数字の世界では1にしかないけれど、人間の世界では $1+0=10$ になる。これは経営学では「シナジー効果」というが、より広く言えば「ネットワークの相乗効果」である。親友や恋人、家族、そして会社と従業員関係も1と0の関係が望ましいという柳川の解釈を述べ、全員でディスカッションしたい。

### ②キーワード

1 + 0、シナジー効果（こうか）、ネットワーク、サンリオ、人（ひと）は1人（ひとり）では生（い）きられない、social communication、complementarity（相補性（そうほせい））、ずうっとずっと大好（だいす）きだよ（I'll always love you.）

## 第3講 詩を読んで表現しよう

### ——金子みすゞ「わたしと小鳥とすずと」を読む——

### ①講義エッセンス

「わたしと小鳥とすずと」を読んで、学生に「日本語の感想」を書いてもらい、そのいくつかを学生に読み上げてもらい、柳川のコメントを述べる。次にこの詩が、存在するもののそれぞれの存在価値を、その唯一無二の独自性に置いていることを解説し、相対比較の世界観と、絶対値の世界観とを話してみたい。その後全員でディスカッションする。

## ②キーワード

比較不能（ひかくふのう）な独自性（どくじせい）（incomparable distinctiveness）、測定不可能（そくていふかのう）（no measurability）、唯一無二（ゆいいつむに）、相対比較（そうたいひかく）、絶対値（ぜったいち）、かけがえのない（one-and-only）、アイデンティティー

## 第4講 受験競争を科学する

### ①講義エッセンス

日本社会に見られる受験競争の中で、最も広範かつ過酷な「大学入学試験競争」を社会的に構造化している「社会的動機付け要因」として、「有名大学へ入学し有名大企業（含む公務員）へ就職することが人生における幸福である」という「幸福の一元主義」がどのように形成されてきたのかをまず明らかにする。その受験競争を勝ち抜くことに対する「社会的支援制度」としての「学習塾」、「予備校」、「家庭教師」、「私立中高一貫教育校」を取り上げる。

さらに子供のいる日本人家庭の過半数が大学受験競争に参加していることを「可能にして」きたのが、第二次大戦後の「日本経済の成功」にあることを、「産業政策」、「高貯蓄」と「日本的経営」の3つの要因によって説明することを試みる。

もうひとつの可能にしてきた要因として「少子化」があるが、少子化という日本社会を震撼させる現象の複雑多様な要因を説明する。

## ②キーワード

受験競争（じゅけんきょうそう）、受験勉強（じゅけんべんきょう）、過労児（かろうじ）、ストップウォッチ・キッズ、お受験（じゅけん）、家庭教師（かていきょうし）、通信教育（つうしんきょういく）、学習塾（がくしゅうじゅく）、予備校（よびこう）、受験技術（じゅけんぎじゅつ）、

内申書（ないしんしょ）、意思決定支援情報（いしけっていしえんじょうほう）、偏差値（へんさち）、訓練可能性（くんれんかのうせい）、銘柄大学（めいがらだいがく）、いい会社（かいしゃ）、良好（りょうこう）な雇用機会（こようきかい）、入社確率（にゅうしゃかくりつ）、生涯所得（しょうがいしょとく）、地位財（ちいざい）、幸福（こうふく）の一元主義（いちげんしゅぎ）、私立中高一貫教育（しりつちゅうこういっかんきょういく）、いじめ問題（もんだい）、受験効率（じゅけんこうりつ）、教育投資仮説（きょういくとうしかせつ）、産業政策（さんぎょうせいさく）、高貯蓄（こうちょちく）、日本的経営（にほんてきけいえい）

## 補論 受験競争はどうなるか、大学4年間で何を学んだか

——入試偏差値から卒業時の学習成果が問われる時代へ——

### キーワード

終身雇用慣行（しゅうしんこようかんこう）のゆらぎ、早期退職優遇制度（そうきたいしょくゆうぐうせいど）、新卒採用行動（しんそつさいようこうどう）の変化（へんか）、リスク回避（かいひ）、リスク選好（せんこう）、入学偏差値（にゅうがくへんさち）、学校歴（がっこうれき）、卒業時（そつぎょうじ）の能力（のうりょく）、学習歴（がくしゅうれき）

## 第5講 配偶者選択競争を科学する

### ①講義エッセンス

現代日本社会は歴史上かつてない程、結婚するカップルの平均年齢が上昇し（晩婚化）、結婚したくないという人々（非婚者）が増加、結婚したくても結婚できない人々（未婚者）も増大しつつある社会であるが、若い人々、特に若い女性に「無理に結婚しなくていい」と「社会的に動機付けられている要因」を12要因摘出して説明したい。

## ②キーワード

少婚化（しょうこんか）、非婚化（ひこんか）、未婚化（みこんか）、晩婚化（ばんこんか）、結婚適齢期（けっこんてきれいき）、クリスマスケーキ、大晦日（おおみそか）、皆婚主義（かいこんしゅぎ）、見合結婚（みあいけっこん）、自由婚主義（じゆうこんしゅぎ）、恋愛結婚（れんあいけっこん）、テニスコートの恋（こい）、両親（りょうしん）の結婚生活（けっこんせいかつ）、男性（だんせい）の古（ふる）い結婚観（けっこんかん）、容姿端麗（ようしたんれい）、人柄（ひとがら）、第二（だいに）の母（はは）、経済力（けいざいりょく）、パートナー、支（ささ）え、コミュニケーション、ピーターパン・シンドローム、永遠（えいえん）の子供（こども）、夏目漱石（なつめそうせき）、高等遊民（こうとうゆうみん）、プータロー、上方婚（じょうほうこん）、三高志向（さんこうしこう）、女性（じょせい）の高学歴化（こうがくれきか）、下方婚（かほうこん）、同級生婚（どうきゅうせいこん）

機会費用（きかいひよう）、ハナコ、親（おや）との同居（どうきょ）、生前贈与（せいぜんぞうよ）、マミーズローン、可処分所得（かしょぶんしょとく）、自由（じゆう）の喪失（そうしつ）、親（おや）の長寿化（ちょうじゅか）、共依存（きょういぞん）、親離（おやばな）れ、子離（こばな）れ、社会的結婚圧力（しゃかいてきけっこんあつりょく）、家事（かじ）の外部化（がいぶか）、シンデレラコンプレックス、生（う）まれ変（か）わり、高（たか）い自己評価（じこひょうか）、愛（あい）される理由（わけ）、交際期間（こうさいきかん）の長期化（ちょうきか）、加齢恐怖（かれいきょうふ）

## 第6講 定年後の再就職競争を科学する

### ①講義エッセンス

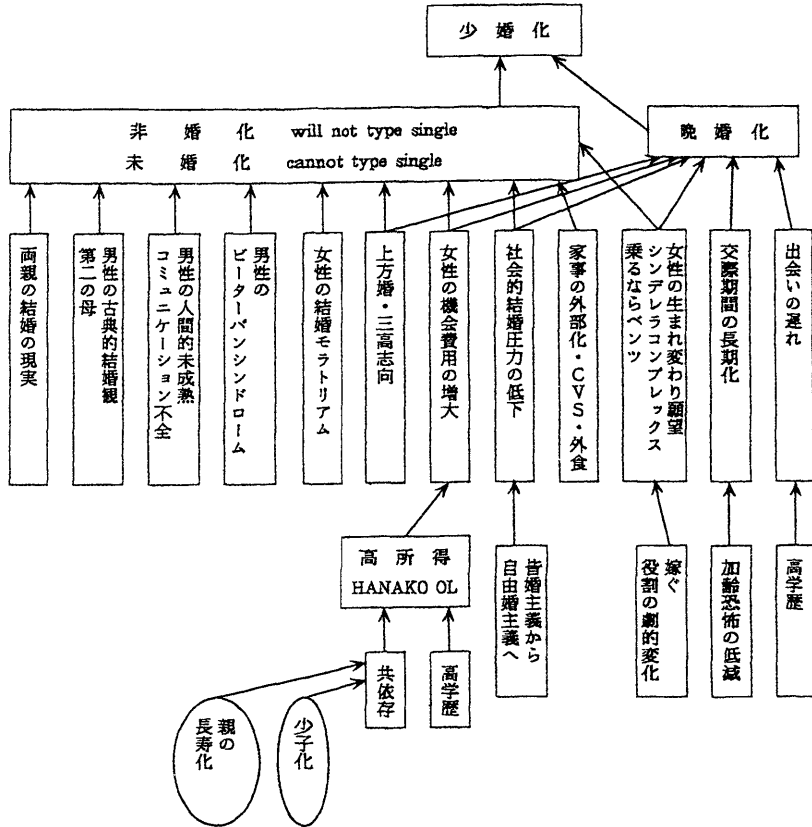
これまでの日本の平均的男子サラリーマンは、60歳定年を迎えると定年

退職し、それ以後は企業からの「退職一時金」と、国から支給される「年金」とで一応「安定した退職生活」、「毎日が日曜日」生活を送ることが可能であった。しかし最近急速に日本社会で問題化してきている「少子高齢社会」の進行は年金財政を破綻させ、年金支給開始年齢の65歳引き上げを近い将来現実化させることとなり、定年退職後数年間は年金がもらえない日々が生じることとなる。さらに日本経済の失速とともに企業の従業員がリストラの対象となりつつあり、定年まで勤務し続けられるという保障が失われつつあり、退職一時金も満額もらえない現実が数多く見られるようになった。定年後そして定年前に再就職しなければならないと「社会的に動機付けられた」中高年がなぜ増加してきたのかを分かり易く説明する。

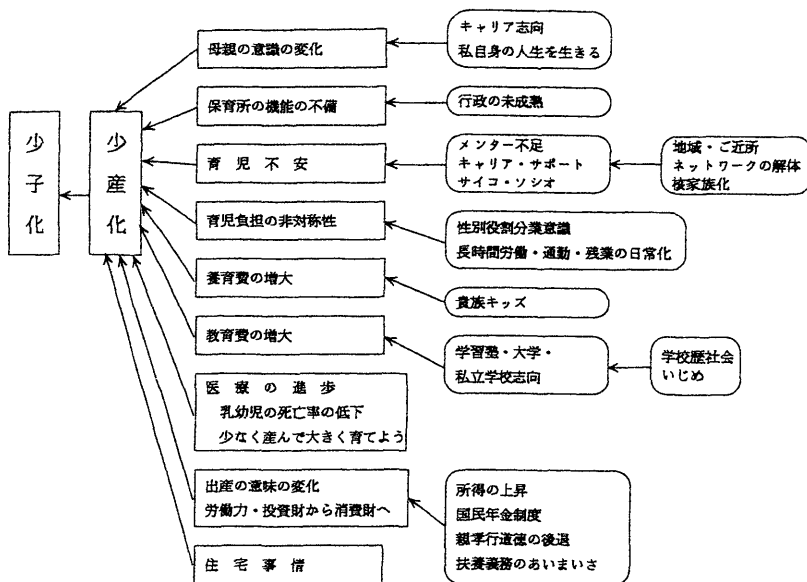
## ②キーワード

少子高齢社会（しょうしこうれいしゃかい）、高齢化率（こうれいかりつ）、高齢者人口（こうれいしゃじんこう）、少子化（しょうしか）、合計特殊出生率（ごうけいとくしゅしゅっせいりつ）、生産年齢人口（せいさんねんれいじんこう）、経済成長（けいざいせいちょう）、生活水準（せいかつすいじゅん）、年金財政（ねんきんざいせい）、成熟度（せいじゅくど）、医療保険制度（いりょうほけんせいど）、国民負担率（こくみんふたんりつ）、老人医療（ろうじんいりょう）、自己負担率（じこふたんりつ）、年金支給開始年齢（ねんきんしきゅうかいしねんれい）の繰（く）り延（の）べ、年金減額（ねんきんげんがく）、高齢者雇用（こうれいしゃこよう）、体力（たいりょく）の衰（おとろ）え、有効求人倍率（ゆうこうきゅうじんばいりつ）、portable skill、marketable skill、キャリアデザイン

資料1 非婚化・未婚化・晩婚化・少婚化

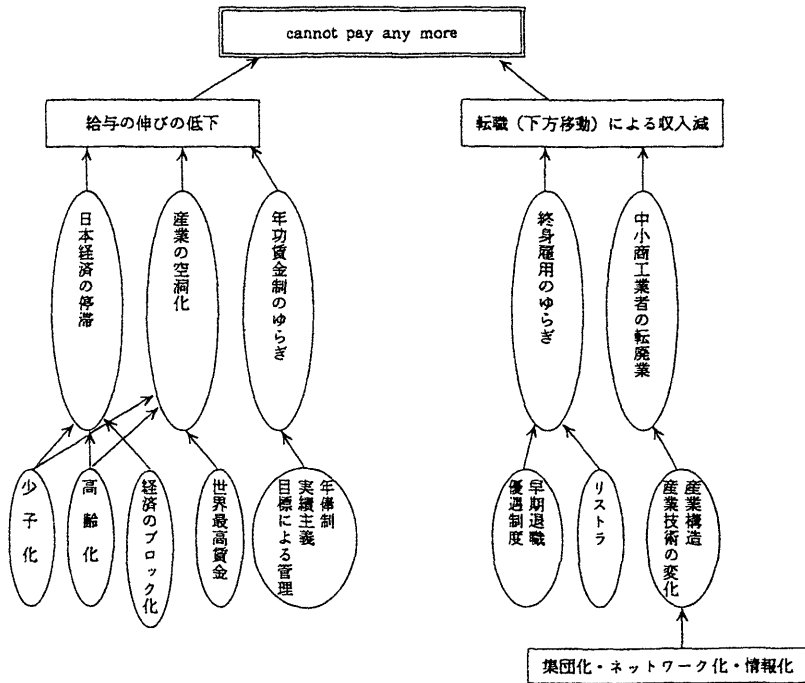


## 資料2 少産化と少子化

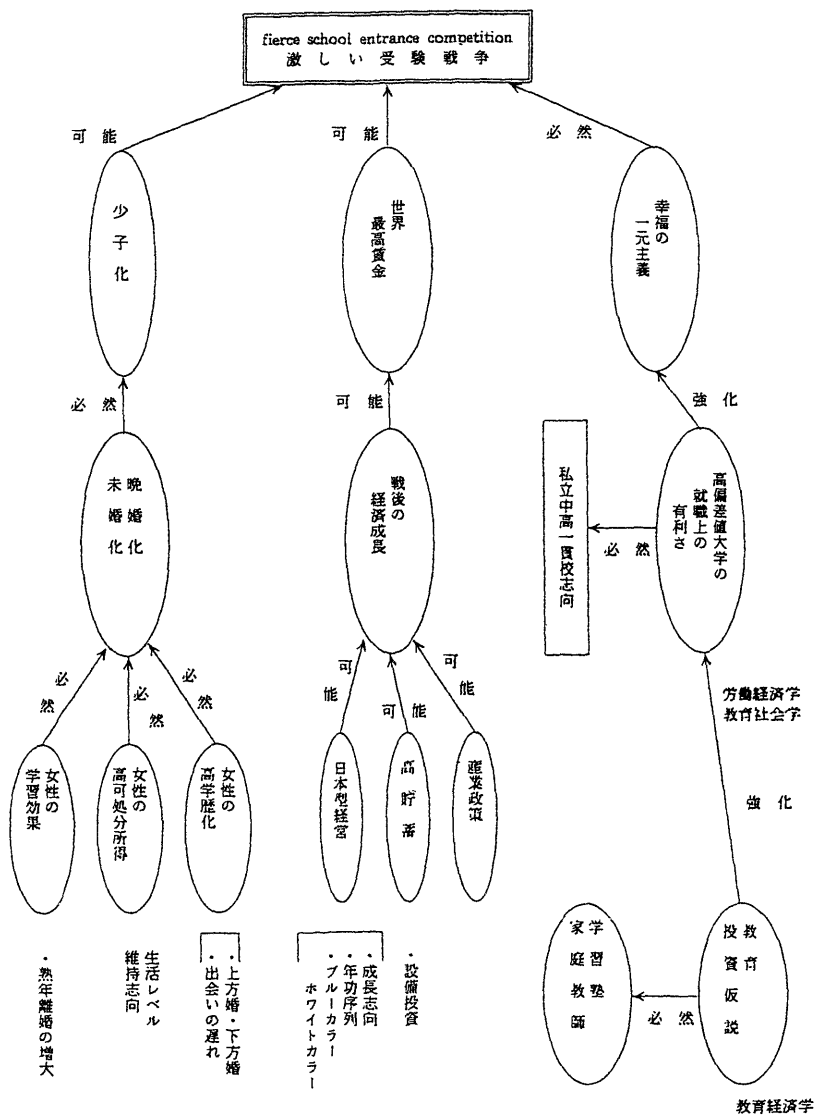




資料3 家庭の子供の養育・教育用負担能力を停滞ないし低下させる要因



資料 4 教育投資を今後も必要にさせる要因



第7講 激しい受験地獄と勉強しない大学生—アマン先生へのお答え—  
—— entrance-examination hell and  
idle university students ——

①話のエッセンス

同僚のオーストリア人教師のアマン氏からの、あれほど激しい受験戦争を戦ってきた大学1年生が、不本意入学すると敗者復活戦を大学時代に行なおうとせず、殆どの学生が熱心に勉強しようとししないのはなぜかという問いかけに答えたものが本節の話である。

答えの論旨はおおよそ次の通りである。

日本人の大学生は、社会によってその勤勉さを剥奪されてきたばかりでなく、大学教育そのものによっても勤勉さを剥奪されてきた。しかし近年の高失業、学卒労働市場の縮小に伴う就職難の時代と、リストラや企業倒産による定年までの雇用保障の崩壊の中で、大学生達は学習する必要性に目覚めつつあるが、そのような学生の要求に応えうる practical knowledge を与えうる「組織的教育能力」を十二分に有している大学は残念ながら極めて少ない。大学は教育能力を高めていく自己変革が必要であり、その為の処方箋のひとつを私は提案した。大学生は良いゼミナールで厳しいトレーニングを受け、employability の内容の大きな一部分をなす、価値観の束と must skill と power-up skill を高めていく努力を自ら重ねていかねばならない。

②キーワード

アマン先生（せんせい）の3つの疑問（ぎもん）、不本意入学（ふほんいにゅうがく）、敗者復活（はいしゃふっかつ）、学習（がくしゅう）からの逃走（とうそう）、アマン先生の宿題（しゅくだい）、大学（だいがく）の学習価値（がくしゅうかち）、Learning makes your future.

社会（しゃかい）によって剥奪（はくだつ）される勤勉（きんべん）さ、偏差値（へんさち）、持続的学習能力（じぞくてきがくしゅうのうりょ

く)、企業内教育(きぎょうないきょういく)、訓練可能性(くんれんかのうせい)、配置転換(はいちてんかん)、昇進(しょうしん)、労働生産性(ろうどうせいさんせい)、企業内能力開発(きぎょうないのうりょくかいはつ)、人的資源管理(じんてきしげんかんり)、採用(さいよう)のコストとリスク、日本(にほん)の労働市場(ろうどうしじょう)の特質(とくしつ)

教育(きょういく)によって剥奪(はくだつ)される勤勉(きんべん)さ、教育内容(きょういくないよう)の100%の自由(じゆう)、教育方法(きょういくほうほう)の100%の自由(じゆう)、自由人(じゆうじん)の集合体(しゅうごうたい)、個人(こじん)の良心(りょうしん)、教育重視文化(きょういくじゅうしぶんか)、安定(あんてい)と墮落(だらく)、単位取得(たんいしゅとく)の容易(ようい)さ、楽勝科目(らくしょうかもく)、敗北(はいぼく)の見(み)えにくい集団敗北(しゅうだんはいぼく)ゲーム、教育(きょういく)しない教師(きょうし)

社会的不用大学(しゃかいてきふようだいがく)の6つのシグナル、受験生(じゅけんせい)マーケット、労働(ろうどう)マーケット、卒業生満足度(そつぎょうせいまんぞくど)、従業員(じゅうぎょういん)の所属大学評価(しょぞくだいがくひょうか)、外部評価(がいぶひょうか)に耐(た)えうる研究者(けんきゅうしゃ)の数(かず)、地域貢献(ちいきこうけん)の度合(どあい)

社会的(しゃかいてき)に有用(ゆうよう)な大学(だいがく)、専門能力(せんもんのうりょく)の束(たば)、人間的常識(にんげんてきじょうしき)の束(たば)、個人的教育倫理(こじんてききょういくりんり)、学校文化(がっこうぶんか)、悪貨(あくか)は良貨(りょうか)を駆逐(くちく)する、組織的教育能力(そしきてききょういくのうりょく)

高失業率(こうしつぎょうりつ)、学卒未就職者(がくそつみしゅう

しょくしゃ）の増加（ぞうか）、大学院進学（だいがくいんしんがく）、新卒採用（しんそつさいよう）の抑制（よくせい）、employability、社会的（しゃかいてき）に動機付（どうきづ）けられた勤勉（きんべん）さ、リストラ、倒産（とうさん）、指定席券社会（していせきけんしゃかい）、目覚（めざ）めた学生（がくせい）、目覚（めざ）めぬ教員（きょういん）、教育能力（きょうういくのうりょく）を欠（か）いた教員（きょういん）、学習意欲（がくしゅういよく）、教育意欲（きょうういくいよく）、知的能力（ちてきのうりょく）の枯渇（こかつ）、無限持続的学習（むげんじぞくてきがくしゅう）

外発的動機付（がいはつてきどうきづ）け、第三者（だいさんしゃ）による授業（じゅぎょう）の外部評価（がいぶひょうか）、学生（がくせい）による授業（じゅぎょう）の内部評価（ないぶひょうか）、同僚（どうりょう）による授業（じゅぎょう）の内部評価（ないぶひょうか）、宇都宮大学国際学部（うつのみやだいがくこくさいがくぶ）の外部評価報告書（がいぶひょうかほうこくしょ）、父兄（ふけい）による授業参観（じゅぎょうさんかん）、授業改善（じゅぎょうかいぜん）プラン、同一科目（どういつかもく）の複数同時開講（ふくすうどうじかいこう）、講義負担（こうぎふたん）の軽減（けいげん）、学内行政負担（がくないぎょうせいふたん）の軽減（けいげん）、インセンティブ

ゼミナール、本物（ほんもの）の人物（じんぶつ）、個別的対応（こべつてきたいおう）、本格的（ほんかくてき）ゼミナール、アットホームだけのゼミ、サークルゼミ

大学時代（だいがくじだい）の発達課題（はったつかだい）、個性（こせい）、物理的個性（ぶつりてきこせい）、性格的個性（せいかくてきこせい）、価値観（かちかん）の束（たば）、能力（のうりょく）の束（たば）、must skill、professional skill、power-up skill、基礎勉強体力（きそべんきょうたいりょく）、自己学習能力（じこがくしゅうのうりょく）、ability making ability、知的含（ちてきふく）み、情報検索能力（じょ

うほうけんさくのうりょく)、本(ほん)の活用能力(かつようのうりょく)、1人QCサークル、ベンチマーキング

## 1. アマン先生の質問

私どもの大学には、新入生を大きなホテルに集めて一泊させて大学に慣れるように準備教育を行なう「**新入生オリエンテーション**」と呼ばれる催しがあり、自宅以外では良く眠れない私は1年生のクラス担任の時しか参加しませんので4年に1回しか参加しませんが、今年(1999年4月)の前は4年前の1996年4月のことでしたが、そこで私は大変面白い体験をして、これから話すようなことを考え始めてようやく最近まとまったのです。

私の勤務している大学でドイツ語とフランス語を教えている**オーストリア人のアマン先生**から夜ホテルの部屋で私におおよそ次のような質問がなされました。アマン先生が私に対してある質問をしようと思われたきっかけは、その晩の夕食後に行なわれた在学生代表による新入生歓迎レセプションの席上での在学生代表の発言でした。10人近くの先輩学生全員が、「**白鷗大学は第1志望ではなかった。本当に入りたかった大学は別にあった**」と話しました。このことがオーストリア人のアマン先生にとっては不思議でたまらないことでした。アマン先生はもし自分達オーストリア人ならば、希望とは違う大学へ「**不本意入学**」したとしても、入学後に頑張って実力を着けて社会に出れば希望の大学に入れなかったとしても人生に負けたことにはならないと「**敗者復活の機会の存在**」を確信し、大学で一所懸命努力しようとするでしょう。それなのに自分が教えている大学生の殆どが大学で余り勉強しようとはしていないと思われます。日本人学生達は「**なぜ入学した大学で懸命に勉強しようとはせずに学習から逃走しようとするのですか**」とアマン先生は私に質問されたのです。

私自身の大学入学時、国立一期校(格上の国立大学)の入試に失敗し、二期校の福島大学へ入学した当初にこれからは学歴だけでは生きていけない。とにかく必死に勉強して実力を着けなければいけないと考え、高校生の時よ

りも真剣に勉強した経験を持っていましたので、「大学の学習価値」に露ほどの疑いも持ったことがありませんでしたからアマン先生の質問は私にとり大変新鮮なものでした。

私は自分の貧弱な英語力を総動員してアマン先生に2時間近く説明をしましたが、自分でも100%の確信の持てる説明ではないことを話しながら十分に自覚していました。その後私は「アマン先生の宿題」を胸にしまい、折に触れて考えを重ねてまいりました。私は直接的な解答を考えるという作業を時々行なう一方で、1年生の経営学や2年以上の学生を主要対象とする経営学史Ⅰ・Ⅱ、経営戦略論という自分の科目の中で、なぜ大学に入ってから一所懸命に勉強する必要があるのかという「大学の学習価値」を積極的に話すように心がけ、Learning makes your future. というメッセージを学生達に語り続けています。それと同時に大学卒業生が身に着けるべき能力の束を構成する各能力の特質とその修得方法をも積極的に語りかけています。

それでは、以下においてアマン先生の宿題に対する私の一応の答えを述べていきましょう。

## 2. 社会によって勤勉さを剥奪されている大学生

学生が大学で殆ど勉強しない（特に文科系、社会科学系の大学ではそうですが）という傾向が日本社会に定着してきたこと、つまり大学生を「勉強しなくてもいいのだ」と社会的に動機付けてきた要因としては、大学内部と、学生が卒業後就職する企業の側という大学外部の要因との2つを挙げることができます。

まず初めに、大学生が「社会によって勤勉さを剥奪されている（socially deprived industriousness）」という状況についてお話ししましょう。

文科系の大学卒業生は理科系の大学卒業生とは異なり、大学で何をどれだけ勉強してきたのかは就職する会社からはこれまでは余り問題されることはありませんでした。その代わりに「出身大学名」がかなり重視されてきました。出身大学名によって実質的に重視されてきたのは、偏差値の高さ、つま

り入学試験得点能力の高さでした。学校歴はその能力を表わすシグナルの役割を果たしてきました。シグナルとしての学校歴によって示される偏差値の高さは、余り面白くない受験勉強をコツコツ続ける「持続的学習能力」を表していると考えられ、企業にとってそれは「企業内教育 (intra-company education)」によって効率的かつ効果的に仕事能力を身に付けていく「訓練可能性 (trainability)」の高さを意味しているのです。高偏差値＝高訓練可能性の所有者ほど教育訓練コストが少なくて企業にとり望ましいのです。

日本の企業において訓練可能性が重要視されるのには理由があります。終身雇用慣行が主流の日本の企業の中で従業員は様々な仕事を行なうこと（配置転換）が普通ですし、継続的に肩書きも変化し（昇進）沢山の部下を管理できなければなりませんから「企業内能力開発」が不可欠になります。さらに日本型雇用慣行である年功賃金制の元では同じ仕事に就いていても年々賃金は上昇していきますから、その賃金上昇に見合う分仕事の能率（労働生産性）が上がっていかねばなりませんから、その点からも「企業内能力開発」は必要不可欠になります。日本の大企業は、高い訓練可能性の持ち主を入社させ、潤沢な資金によって企業内教育投資を従業員に対して行なうことという「人的資源管理 (human resource management)」を実施してきたと言えるでしょう。

企業の人事担当者にとり、終身雇用慣行のもとでは1人の正社員を雇用することは、賃金だけで4～5億の買い物の意味しており、賃金以外のものを含めての総人件費は極めて大きな額にならざるをえません。人材採用のコストとリスクをともに削減しようとする場合、学校歴を予め考慮して決めることは、これまではそれなりに合理的だったと言えるでしょう。勿論学校歴のみで劣悪な労働者を採用するリスクを減らす為に面接試験が行なわれることとなるのです。

文科系の大学生の就職したい大企業が、大学4年間の学習成果を殆ど評価せずに入学時の偏差値の高さを重要な基準として採用行動を行なうという日本の労働市場の特質を「観察学習」してくれば、入学後に「敗者復活」の



チャンスは殆どないと「思い込んで」学習意欲を持たなくなることは極めて自然なことでしょう。このようにして日本人の大学生（特に文科系の）は勤勉さを社会によって剥奪されてきたとすることができるでしょう。

### 3. 教育によって勤勉さを剥奪されている大学生

それでは次に、大学生が他ならぬ「教育によって勤勉さを剥奪されている (educationally deprived industriousness)」という状況についてお話ししましょう。

大学というのは実に独特で不思議な組織になっています。必ず学習しなければならない「必修科目」と、自由に選べる「選択科目」の多様な授業が1年間に本学の場合約120くらい開かれています。そのひとつひとつの講義でどんな内容が話されるのかという「教育内容の100%の自由」と、どうふうに教育し、どう評価するのかという「教育方法の100%の自由」を教員1人1人が持っていて、他の誰かがその権利を侵害することはできません。「自由人の集合体」が大学に他なりません。大学教員の昇進（えらくなっていくこと）の基準は職務経験という物理的年数と研究論文の数（問題にされるのは数だけですから劣悪な質のものや極めて不十分な量のものも1本は1本としてカウントされます）だけですから、大学では「良い教育をする」ことは「組織的・制度的に全く動機付けられていない (organizationally, institutionally not motivated)」ことになります。良い教育をするかどうかは「個人の良心」と、目に見えない大学の「教育重視文化」のいずれか一方か双方が存在していなければなりません、それは例外的なケースにならざるをえないのが現実でしょう。

私の大学時代に巡り合った先生の中には文字通り情熱を込めて講義する教育熱心な方もおられましたが、大多数は「仕方なく」という様子がありありでした。1年生の時の化学の教授は、「世界中の苦悩を背負ったような顔付きをして」、「いやでいやでたまらなそうに」授業をしました。遅れて教室に入ってきて小さな声でボソボソと話すお葬式のような雰囲気 of 授業をしました

た。今でも鮮明に記憶に残っているこの授業ほどひどくはなくても、先生に「何としても理解させよう」という気迫の全く感じられない「気の抜けたビール」のような授業はうんざりするほど沢山ありました。

先に述べたように、卒業後の就職マーケットの状況から「学習意欲」を最初から持っていない多数の学生達と、良い教育をしても何の見返りも（一見したところ）無いので「教育意欲」を欠いたこれも多数の教員達とにより、大学内には「安定と墮落」の雰囲気が漂わざるをえなくなってきます。このような学生と教員とが手を携えて作り出すのが、単位取得の容易な「楽勝科目」の氾濫です。教育コストと学習コストを最小化したいという**能率重視の怠け者達**による「敗北が見えにくい集団敗北ゲーム」が大学で恥も外聞もなく繰り広げられることとなるのです。そしてこのようなゲームに参加する教員にそうはさせないペナルティーが全く欠けているのが大学の特質ですから「**教育しない教師**」が大手を振ってまかり通ることとなり、多くの大学生は、「教育によって勤勉さを剥奪される」ことにならざるをえないのです。

## 補論 大学改革私案

### 1. 社会的に必要とされない大学 6 つのシグナル

大学が社会的に必要とされるかどうかのシグナルとしては次の 6 つを挙げることができるでしょう。その第 1 のシグナルは、入学生の受験偏差値が 50 から降下を続け受験倍率が低下していくことで、**受験生マーケットでの大学格付けの低下**と言うことができるでしょう。第 2 のシグナルは卒業生の就職状況で、入社する会社の中のいわゆる有名大企業の割合の低下と実質就職決定率の低下で、**労働マーケットでの大学格付けの低下**と言うことができるでしょう。第 3 のシグナルは、**卒業生の満足度調査**です。これを調べるには、「自分にもし子供が生まれたらこの出身大学に入学させるかどうか」を聞けば一目瞭然です。この答えの yes が少ない大学ほど教育サービス購入者の満足度が低いこととなり、実際の**消費者の購入後の大学格付けの低下**と言え

るでしょう。第4のシグナルはその大学で教えている専任教員が自分の子供を是非入れたいと考えているかどうかです。それは**大学の従業員による大学の自己評価の高低**を示すものと言えるでしょう。この数字の低い大学は身内からも評価されない大学と言えるでしょう。第5のシグナルは、まがい物論文を書かず、本格的な論文をきちんと書き、大きな学会の全国大会で報告し、文部省の科学研究助成金をもらっているような、**外部からの評価に耐える研究者**が何人いるのかということです。外部の評価に耐えられない大学教員が多ければ多いほど社会的に必要とされる度合いは低くならざるをえないでしょう。第6のシグナルは、大学が立地する地域への「**地域貢献の度合い**」です。自治体の審議会や諮問機関への参加、地域の生涯学習への講師派遣、大学の各種公開講座が充実しているかどうかは大学の社会的必要度の高さを意味していると考えられます。

## 2. 大学の存続と成長と組織的教育能力

**社会的に必要とされる大学**として生き残っていける大学になりうる為の不可欠の条件は、卒業生を職業人としても人間としても**社会の評価に耐える「まともな人間」**として社会に送り出していく「**組織能力**」を大学が持っているかどうかです。卒業生は各種の「**専門能力の束**」であり「**人間的常識の束**」であり「**学習能力の束**」であり、100数10単位分の多様な教育の集合的な成果として形成されてくる能力の束として捉えることが可能です。多数の教員の教育努力の集合体としての「**共創**」の成果が学生の能力となるのですが、実はここに大学教育の一番の問題点が潜んでいるのです。

大学教育の内容と質の決定は100%、そのひとつひとつの科目を担当する教員の裁量権の範囲内にあり、その結果大変劣悪な講義から極めて良質な講義まで実に多くのバラ付きがあり、さらに問題を深刻にしているのは、大学教員に良い教育を行なわせていくことを「**強制する要因**」は、日本の大学制度からは決定的に抜け落ちていることです。良い教育を行なう教員に対する正の報酬は勿論、劣悪な教育を行なう教員に対する負の報酬（ペナル

ティー) も欠けている日本の大学では、良い教育を行なうかどうかは**教員個人の職業倫理と大学文化**のみに依存することにならざるをえません。そのように良い教育活動を行なうことを組織的・制度的に強制するメカニズムが抜け落ちている大学においては、良い教育をするべきであるという「**大学文化 (college culture)**」を有している伝統的大学の良識と、良い教育をしようという高い「**教育倫理 (educational ethics)**」を有している個人の良心とに良い教育ができるかどうかは依存せざるをえません。

良い教育をするべきであるという大学文化が欠けている大学においては、「**悪貨が良貨を駆逐する**」という諺通りの事態が多かれ少なかれ進行していくことは、紛れの無い事実であり、そのような大学には劣悪な教育が大手を振ってまかり通ることとなり、卒業生の質の向上を阻む大きな要因をなすこととなりましょう。学生自身が社会的に評価される為に一所懸命に勉強しなくてはと「目覚めた」場合においても、十分な「能力の束」を学生に身に着けさせていく「**組織的教育能力**」を欠いた大学は、遂にそれを実現することが不可能であることは論を持たないであります。

私立大学の存続と成長とを可能にしていく原動力が、大学の「**組織的教育能力 (organizational capabilities)**」以外にはありえないことはいくら強調しても強調し過ぎることはありません。

### 3. 目覚めない教員をどう変えるか

最後に、最近になってきて大学生が大学で一所懸命に勉強し実力を身につけておくことが、社会的に要請されてきたという社会状況の変化の内容を話し、そのような社会的要請に応えることのできないという意味で、**社会的有用性の無い大学**は淘汰され社会から消滅していかざるをえなくなるという事情についてお話ししましょう。

**1999年3月の失業率**は、調査を始めた1953年以降最悪の4.8%となり、完全失業者数は339万人となり、学卒未就職者は30万人と過去最高になった(日本経済新聞夕刊、1999年4月30日)。年齢別では、15～24歳男性が11.7

%、女性が10.2%、25～34歳男性は5.0%となり、世帯主の失業率は3.4%で最悪記録を更新した（朝日新聞、1999年5月1日）。**学卒未就職者**は昨年より17万人増えて30万人に達し（東京新聞、1999年5月1日）、大学卒業後進学を希望する学生が増え、1993年後のバブル崩壊後の5年間、文部省の学校基本調査によれば、就職者は2%増なのに対し、大学院研究科や大学学部などへの進学者は31%増となり、これが若年失業率を押し下げる効果を果たしている（下野新聞、1999年5月1日）。とちぎ総研の調査によれば、県内企業1,107社の**今春の採用見込み**は昨春に比べ全産業で32.9%減（東京新聞栃木版、1999年5月2日）であり、県内の就職状況も厳しさが増えています。

このような超氷河期に自己の**就職能力**（employability）を高めていくことを、**キャンパスライフの戦略的学習目標**としていくことが今後の大学生の大多数にとり不可欠となることは自明の理であります。このように**労働市場の大きな変化**が、大学生の学習を「社会的に動機付け（socially motivate）」るようになってきたのだと言うことができるでしょう。

さらにバブル後の平成不況の中で、中高年が突然会社から「リストラ」によって企業外に放り出される例が続発し、潰れることなどありえないと思われてきた超有名大企業が倒産するという事実直面した大学生達は、一旦入社してしまえば定年まで雇用が保障され安定した生活が可能であった「**指定席券社会**（reserved-seat-ticket society）」は崩壊したことに気が付き、自分の生活を守る為には、大学時代から必死に勉強し実力を身に着けるしかないということに気が付くようになってきました。このようにして大学生は勤勉さを「社会的に動機付け」られてくるようになりました。キャンパスには「**目覚めた学生達**」が増えてきました。

しかしながら問題は、実力の着くよい教育をして欲しいという学生の要求に応えようとしない（応えることができない）「**目覚めぬ教員達**」、「**教育能力を欠いた教員達**」が大学に居座り続けているという日本の大学の現状の存在です。従って今後学生にとり必要不可欠な高いemployabilityは、講義やゼミに参加していれば自動的に身に着くと考えすることは楽観的に過ぎます。

学生側の努力が不可欠であるからという理由ばかりではありません。実は出席しても employability が身に着かない**プアな講義**や参加しても殆ど意味がない**ゼミナールも**どきがかなり存在しているからです。私自身の母校の講義やゼミナールは大変優れていましたが、私の経験してきた狭い範囲内での見聞から推測する限り現在の平均的大学における「**教育能力**」の低下は目を覆わんばかりの状況です。私自身教壇に立ち23年間目を迎えていても、毎回の講義の準備は夏・冬・春の休みや日頃からの準備と前日の準備を入れれば1回分（90分）につき現在でも9～10時間はかけています。勿論講義内容の15～20％は毎年リニューアルしていますが、自分の事を偉そうに言っているように聞こえたら大変恐縮ではありますがそのような教育者として「**当り前の努力**」をしている大学教員は例外的存在に過ぎません。先に述べた大学生が大学によって勤勉さを剝奪されているという状況は、従来の教育環境の中で、学生は学習意欲を失い、教員は教育意欲を失ってきているという意味で、「社会的動機付けの不十分さ」によるmorale 不足によって引き起こされてきました。しかしながらこのような事態が長年持続し、歌を忘れたカナリヤならぬ「勉強することを忘れた学生達」と「教育することを忘れた教師達」という「**集団敗北ゲーム (collective lose game)**」の入れ替わることのないゲーマーとしての教員達に、目覚めた学生達が実力の身に着く良い教育をして欲しいと要求を出したとしても、それに応える「**知的能力**」は枯渇しているだろうことは推測に難しくはありません。それは現役引退して10年経った元野球選手やJリーガーに、現役選手に混じって正規の試合に参加させることを意味していることに等しいと言えるでしょう。

私自身は知的能力が物理的に枯渇しないように、さらに知的能力が知的陳腐化しないように絶えず新しい情報をインプットし続けていますが、これは「**無限持続的学習 (never-ending learning)**」に他なりませんから結構過酷なレースです。しかしながらこの終わることの無い学習の価値はその実行者にしか分かりません。言葉を飾らずに率直に語ることを許して頂くならば、私は自分の勤務している大学に、私がそこで働いている限りにおいて我が子

に進学することを勧め自分のゼミナールで鍛えるつもりですが、自分が万一それは文字通り可能性はゼロに近いことですが辞職したならば我が子に進学を勧める気持ちは120%無いことをここに正直に告白しておきたいと思います。

率直に言って現在の多くの大学では教育の質を高めていこうとする「**内発的努力**」が生まれてくることは殆ど不可能だと言っても大きな間違いではないでしょう。教育の質を向上させていこうという努力を「**外発的に動機付ける**」方法は大きく分けて2つあると思います。ひとつは「**授業の外部評価システム**」の制度化で、「**第三者による授業の外部評価**」と「**学生による授業の内部評価**」及び「**同僚による内部評価**」の3つによって教育のパフォーマンスを評価することです。宇都宮大学国際学部では学外者による教育・研究の点検・評価を『外部評価報告書』としてまとめ、そこには57の科目についての「**学生による授業評価アンケート結果**」をも収録しています（下野新聞、1999年5月4日）。榊原清則慶応大学教授は氏のエッセーの中で、「**父兄による自由な授業参観制度**」を提唱しています。要は教室を「密室から脱却させる」ことが大切なのです。宇都宮大学国際学部のフォーマルな授業評価の試みに対して、早稲田大学第二文学部の社会人学生のインフォーマルに作った講義ガイドブックは、先発の2誌が「いかに楽に単位が取れるのか」に重点が置かれていたのに対し講義満足度を「星5つ」で5段階評価したものであります（朝日新聞、1999年5月4日）。

このような公正な授業評価を厳正に行なった上で、次の2つのことを制度化していくことが重要であると思われます。授業評価の著しく低い教員には、「**授業改善プラン**」を提出してもらい、シラバスの改善と講義用ノートの作り替えを大学当局が要請し、改善の努力をしない教員、改善を拒否する教員の科目については、**同一科目を別な教員によって同時開講していくことがひとつ目の制度**です。**人為的に競争状態を作り出していくことが、決して反省することのない夜郎自大のような教員には必要な時代が来ている**と思います。授業評価の著しく高い教員に対しては、「**授業負担の軽減**」と「**学内行政負**

担の軽減」という「インセンティブ」が与えられるべきです。努力している者が正当に報われることは大学という組織においても必要なことでしょう。

#### 4. 身に着けるべき employability

目覚めた学生達の身に着けるべき employability の内容について最後に簡単に触れておきましょう。

employability はいくつかの**仕事能力の束**と、**良き職業人たりうる為のいくつかの性格的特性、生活態度、学習能力**との複合的組み合わせから成立していると私は考えております。

何をさて置いても真先に勧められることは、教育者としても研究者としてもそして人間としても「**本物の人物**」が行なっているゼミナールに参加することです。ゼミナールは「万能薬」ではありませんが、学生1人1人の個人的活動（レポート報告や発言、質問等）に対して「**個別的対応**」を行ない、**学生個人を聴き手とする発言が持続的反復的になされる大学の唯一の機会**で、最も教育効果の高い教育方法だと考えられます。私自身はゼミナールの恩師から、専門的知識、日本語の話し方と書き方、英語とドイツ語の正確な読み方、論理的思考方法、本の批判的かつ正確な読み方、さらに教育の仕方、研究の仕方、人間として何が大切か、等々実に多くのことを学びました。現在の私の職業人としての能力の殆ど全てを私は、「**私の生命はゼミナールと講義である**」とおっしゃったゼミナールの恩師からプレゼントして頂いたものに他なりません。大学ではハードな、学生をよく成長させる「本格的ゼミナール」をまず選ぶべきでアットホームなだけのゼミやサークルゼミのような「ゼミナールもどき」は後で後悔することが多いと思います。高い employability を身に着ける最短距離は「**良いゼミ**」に入りガンガン勉強することだとここで大いに強調しておきたいと思います。

次に employability を高めていく上で、何をどのように身に着けていったら良いのかについて私の独断と偏見に満ちた「**学習の勧め**」を話してみよう。



大学では人間としての**個性の骨格を作ることが「大学時代の発達課題（development task of university students）」**だと私は考えています。個性は学習や経験によって作られる度合いの低いものから、①**物理的個性**（顔、背丈、声質、血液型等）、②**性格的個性**（几帳面、神経質、せっかち、陽気、気が弱い等）、③**価値観の束**（人生観、人間観、仕事観、異性観等）、④**能力の束**、の4種であると思います。それらの個性の中で、大学時代に形成し身に着けることの必要性が高いのは、③の価値観と、④の能力の束だと思われます。

まず人間として必要性の高い自己の価値観を漠然とでもイメージしておくことが大事で、これが選職や伴侶の選択を方向付ける**価値前提**となります。価値観とは次のような考え方の束です。

**人生観**：人生で一番大切なことと、どうでもいいことは何か

どんな生き方が好きか

**人間観**：どんな人間が好きか

どんな異性が魅力的か

**仕事観**：自分は何が得意か

自分は何をしたいのか

自分は何をしている時に最も充実感があるのか

ひとつだけ注意をしますが、自分が好きでやりたいことが、社会的に必要なことでかつ生活していただくだけの報酬をえられるものが「**仕事**」であって、もしそうでないものは「**趣味**」であることの違いは良く認識しておいて下さい。

次に世の中に出て職業人として生きていくのに必要な**生涯のキャリアデザインの基盤能力**の形成について述べましょう。このキャリアを形成する能力の束は実に多様で、その能力ごとに学習内容と方法とが大きく異なっていることに予め注意を喚起しておきたいと思います。ついでに一言付け加えますと、会社の為に家族も自分も犠牲にする会社人間（company-first employee）は望ましくありませんが、仕事好きで家族も自分も大事にして、

仕事の良くてできる仕事人間（work-centered employee）は、個人にとっても会社にとっても家族にとっても望ましいと思います。

会社員としても私と家族と会社とが共に幸せになる happy triangle は大変望ましいことだと私は考えています。さて能力の束は大きく次の2種類に分かれます。

①must skill（個人差は小さいが、大学の卒業学部を問わず全労働者が持つべきもの）

a. technical skill（技術的熟練）

①言語コミュニケーション tool の使い方に習熟すること

ex. 外国語（英語）、簿記、computer

②日本語の言語コミュニケーション能力に習熟すること

\*学習内容と学習方法が標準化されているので、500～1,500時間学習するかどうかで能力が身に着くかどうか決まる。

b. professional skill（専門的熟練）

本学の卒業生の場合は、経営学の基礎知識と運用能力（ex. マーケティング、リーダーシップ、戦略論）である。実際に仕事に応用できる practical knowledge でなければならない。

②power-up skill（個人差が大きく、自己を他者と差別化することができる独自能力）

a. まずその為の**基礎勉強体力**を身に着ける

- ・勉強するクセ
- ・集中力
- ・継続力

b. **自己学習能力**

大学時代にこの能力を身に着けることができれば授業料などは実に安いもので、生涯に渡って自己の能力を高めていくことを可能にする ability-making ability であり、私（柳川）にとって最大の財産（知的含み）である。

- ・情報検索能力：必要な情報を短時間で見付け出してくる能力、データベースの整理能力や人脈の広さなども含まれる。
- ・本を読み、そのエッセンスを実行に移し成果を出せる能力、本の活用能力
- ・本の read → understand → act → performance
- ・1人Q C サークル（自分の失敗から学ぶ能力）  
confrontation(問題直視) → find(原因発見) → improvement(改善活動)
- ・ベンチマーキング（最良のお手本に学び自分もそうなれる能力）

## 第8講 なぜ日本の家庭は子供中心なのか

—— children-centered family in Japan ——

### ①話のエッセンス

日本の家庭は、いろいろな事実から見て「子供中心家庭」と言って良い。なぜそうになっているのかは次の3つの理由からである。

ア. 子供に嫌われたくない、子供に愛されたいという両親が、厳しい社会化教育の役割を放棄し、友達親子になっているのが現状である。子育て経験と核家族化がそれを助長している。

イ. お父さんは、時間と心理的エネルギーの殆どを会社に捧げていて、家庭を欠いており、パパ抜き家庭の主人公は子供達とならざるをえない。

ウ. 専業主婦で、社会との接触を著しく欠いた多くのお母さん達は、時間と心理的エネルギーの殆ど全てを子供の教育に集中し、一見子供中心に家庭が動いているように見えるが、子供達は母親の第2の人生を生きる身代わりである。

## ②キーワード

子供中心（こどもちゅうしん）の献立（こんだて）、洋服（ようふく）は子供中心（こどもちゅうしん）に、子供（こども）の個室（こしつ）、他称詞（たしょうし）、自称詞（じしょうし）、子供中心家庭（こどもちゅうしんかてい）、自己（じこ）チュー、核家族（かくかぞく）、子供（こども）に愛（あい）されたい、しつけ、社会化教育（しゃかいこきょういく）、いい父親（ちちおや）、いい母親（ははおや）、友達親子（ともだちおやこ）、アットホームゼミ、学生（がくせい）の自主性（じしゅせい）、ゼミナールもどき、教育（きょういく）の基本型（きほんけい）、家庭（かてい）を欠（か）いたお父（とう）さん、社会（しゃかい）を欠（か）いたお母（かあ）さん、会社人間（かいしゃにんげん）、滅私奉公（めっしほうこう）、終身雇用（しゅうしんこよう）、年功賃金（ねんこうちんぎん）、会社丸抱（かいしゃまるが）え、長時間残業（ちょうじかんざんぎょう）、付（つ）き合（あ）い、赤（あか）ちょうちんノミネーション、company、お母（かあ）さんの家庭内孤立（かていないこりつ）、母性神話（ぼせいしんわ）、専業主婦（せんぎょうしゅふ）、母子密着（ぼしみっちゃく）、家庭内教育（かていないきょういく）の放棄（ほうき）、take dream of、自己決定権（じこけつていけん）

いろいろな食品会社が**家庭の食事のメニュー**を家族の誰を最も重視してお母さんが料理しているのかを調べた調査によりますと、昔はお金を稼いでくる**お父さんの好きなものが中心**でしたが、現在では**子供の大好きな物が中心**に変わってきています。洋服を作っているメーカーやそれを売っている所が行なっている調査によれば、お母さん達が洋服を買う順番は子供のもの、自分のもの、そして最後にお父さんのものの順だそうです。日本の住居は豊かな経済先進国の中では最も狭くて1人当たりの居住面積が小さいのですが、子供の個室の保有率は大変高い国です。日本のお父さんの中で自分専用の書斎を持っているお父さんは極めて少なく例外的存在ですが、長野県のある公

立高校では生徒の82%が自分1人の部屋を持っています。

私の家では妻と私とはお互いに「パパ」、「ママ」と呼び合っています。子供に向かって私は、「さあ、パパと買い物に行こう、パパと絵本を読もう、パパと一緒に宿題をしよう」と、お互いに呼び合う「他称詞」も、自分で自分のことを指す「自称詞」も、ともに「**子供の視点**」から決まってきていることもまた日本の家庭が「**子供中心家庭**（children-centered family）」であることをはっきりと示しています。

日本の家庭が子供中心になってきているのは、日本の家族関係に日本独特のいくつかの特色があるからだとは私は考えています。

まず赤ん坊や幼児は、いわゆる「自己チュー（self-centered personality）」そのもので、若いパパやママの思い通りには全くならない存在で、パパやママは夜泣きやぐずる子供にふり廻されながら子育てをします。昔のおじいちゃんやおばあちゃんが一緒に生活していた**大家族**の時代には、子供中心に生活することは不可能なことでしたが、現在の**核家族**の家庭においては子供中心に生活が廻ることに苦言を呈する年長者はいません。子供中心の子育て経験を通して、体験的に「子供中心文化」が日本の多くの家庭に学習され根づいたのです。

第2の理由は日本のお父さんお母さんは、「**子供に愛されたい**」という気持ちが強いことです。かつては父親も母親も子供が世の中に出ていった時にきちんとした大人になるようにと厳しく「しつけ」しました。これを「**社会化教育**」と言いますが、当然子供を厳しく叱らなければなりませんから子供はこわがり仲の良い友達関係とは別の緊張した関係にならざるをえません。今の父親や母親はこのような子供との緊張関係が生じることを嫌い、物分かりの良い「いい父親」や「いい母親」を演じることを好みます。昨今流行りの「**友達親子**」というのは、しつけを放棄した親以外の何物でもありません。大学には小集団で学習するゼミナールという制度があり、大学で唯一ツウエイコミュニケーションで、学生の専門能力をトレーニングする小集団学習です。私の恩師のゼミはそれはそれは厳しいもので、論理的なものごとを

考えてそれを他人に分かるように説明するとはどういうことなのかを叩き込まれました。多くのゼミ学生に、先生は深く尊敬されてはいますが、「大変恐い方」だという共通の印象を持たれています。私も学生時代は大変恐い人という印象を持っていましたが、大学教員としてまた研究者として1人で仕事をしていくようになってから、あの先生の厳しいしつけがあったからこそ何とか1人立ちできるようになれたのだと深く深く感謝しています。そのようにしつけて頂けなければ、目の前の学生達にきちんとした教育をすることは遂に不可能でしたでしょう。私の経験する身の廻りにも大学院で厳しいトレーニングをされることがなかったのか、本人がいかげんなのか、きちんとした教育は勿論きちんとした研究もともにできない若い大学教員は一杯います。自分の専門とする科目すら満足に教えられないそういう大学教員は、学生に嫌われたくない、学生にいい人と思われたいという気持ちが大変強いので、「アットホームゼミ」で、「学生の自主性」を尊重しているかのようでいて、その実きちんとトレーニングするという一番大切なことを欠いた「ゼミナールもどき」を展開する傾向が強くなります。家庭でも学校でも「きちんと叱り子供に嫌われても必要なことを身につけさせる」という「教育の基本型」がないがしろにされつつあると私は感じています。家庭からも学校（大学）からも1人で世の中で生きていけるように子供を育てるという教育姿勢が失われつつあると感じるのは私1人だけでしょうか。

第3に日本のお父さん達には、「家庭が欠けた」お父さんが多く、そのようなお父さんと一緒に生活しているお母さん達には、「社会が欠けた」お母さんが多いことから、子供と密着し一体化したお母さんが沢山生み出されてきていることを挙げることができます。日本のサラリーマンのお父さん達は、一般に「会社人間（company-first employees）」と言われています。仕事が終わってからの自由時間の殆どを会社に捧げ、家族と一緒に時間を過ごすことより会社の都合を優先し、滅私奉公型で会社に100%忠誠を誓うサラリーマンがそう言われますが、会社都合を最優先せざるをえなかったのは、「終身雇用」と「年功賃金制」という日本型雇用慣行の存在ゆえに定年まで

家族全員の生活が「会社丸抱え」になっていることと引き替えにそうせざるをえなかったからです。会社人間のお父さん達が中々家に帰れない理由の第1は「**長時間残業**」がこれまでずっと当たり前だったからです。これは日本の経済が1990年代前半までずうっと右肩上がりの経済成長を続け、会社の仕事は毎年増え続けてきたのにもかかわらず、終身雇用慣行の日本企業では、最も不景気の場合の必要労働者数しか正社員を雇用しない（これを「**予防的雇用**」と言います）ことが普通ですから、「慢性的人手不足」が常態ですので長時間残業は当たり前で、お父さん達は早く家に帰って来ることができませんでした。

会社人間としてのお父さんが中々早く家に帰れない理由の第2のものは、お父さん達は、仕事帰りに「**付き合い**」に参加しなければならないからです。日本の職場（工場でも事務所でも双方で）においては、1人1人の仕事内容が明確に決まっていることは少なく、集団単位に与えられた仕事を集団全体で協力して行なっていくことが普通のことです。皆が**仲良く協力し合**って仕事を進めていく為にも常日頃お互いの気心が知れている為にも団結心を高めしていく為にも、一緒に酒を飲んだりご飯を食べたりするという「**赤ちょうちんコミュニケーション**」は必要不可欠の社会的行動だと言うことができるでしょう。会社という言葉は英語の company を訳したのですが、company とは「**一緒にパンを食べる仲間**」というのが本来の意味ですし、日本には「**同じ釜のメシを食べる**」という行為が仲間になる重要な儀式であるという言葉もありますから、仲良くなる為には、コミュニケーションは不可欠なのでしょう。ついでに学生の皆さんの「飲み会」を「コンパ」と言いますがこれも company の省略形でお互いに仲良くなる為の飲食機会のことをいいます。会社で部下のいる役職者（係長や課長さん達）は、部下の悩みや家庭問題や人間関係をきちんと摺んでおいて、彼らが仕事に全力投球できるように心配りしておく為にも、仕事が終わってから飲みに誘うことは必要不可欠な「**付き合い**」とならざるをえません。

お父さん達サラリーマンの関心は心理的に家庭の外に向けられるばかりで

なく、物理的時間も会社に吸い取られていて、日本の家庭は「パパ抜き」ならぬ「**パパ抜き**」で、日本には「**家庭の欠けた**」お父さんが実に多いというのが私の観察してきている事実です。大学に勤めている私の同僚の男の先生の大半の方々は、その家庭のことはミステリーで「**家庭の臭い**」が殆どしない方々です。私の娘が幼稚園児だった時にクラスメートのエル君（あだ名です）のお母さんからの電話を受けた私が苗字を聞いて、「○○○○君のお母さんですか、いつも娘がお世話になっています」と挨拶したことを、そういうことは初めてで大変感激したと私の妻に語ったそうですから、**子供の友達の名前を知っている父親**というのは実に珍しいことなのだと思います。

日本の大多数のお父さん達は、家庭の中で大変影の薄い存在であるばかりでなく、家族とのコミュニケーションは大変少なくなり、その結果、家事や育児、子供の世話や教育は母親が1人で考えて解決していかなければなりません。子供の問題を父親に相談しいろいろと支援を受けることなく、核家族化した今の家庭においてはおじいちゃん、おばあちゃんに相談できずにお母さんはたった1人で向き合わなければなりません。お母さんは「**家庭内孤立**」の状況に置かれているのです。さらに日本のお母さん達は、「**母性神話**（子供が小さいうちは母親は家にいて子供の面倒を見なければならないという価値観）」と、生活費に見合った給与支払いという夫の「**年功賃金制**」とによって「**専業主婦**」の人々がかなり多いのです。これといった趣味もなく、仕事のない専業主婦達は「**社会を欠いた**」お母さんと言って大きな間違いはないでしょう。社会を欠いた上に、夫とのコミュニケーションを欠いた母親達にとり、子供こそが彼女達の関心の対象であり、全エネルギーを注ぎ込む対象となり、子供の幸せを念ずる余り自分の考える幸せへのルートを描きそのルートに子供を乗せることに夢中になりがちです。このような「**母子密着状態**」は、外側からはお母さんが子供を大事にし、子供中心に家庭が営まれているように見えますが、実はそうではない所に日本の「**子供中心家庭**」の大きな問題点が潜んでいると私は思っています。将来1人で生きていく為の常識や文化的素養をきちんと教え込むという「**家庭内教育の放棄**」のもう片



一方で、母親は「子供と一体化」して、子供の面倒を見る（take care of）ばかりでなく、**子供の夢も（子供に代わって）見る（take dream of）**役割を担い、結果的に子供を自分の為に生きる「**自分の身代わり**」にしているのです。今の若い人々（大学生も含めて）の多くに人生は誰か他人に指示されて決めるのではなく、自分自身の責任とリスクのもとに決定することができない（分からない）人々が多く見られるようになっている原因のひとつは、一見した所、「子供中心」に見える日本の家族の在り方が大きいと私は考えています。自己決定権をどう行使して良いのか分からない人々は着実に増えていると私は思います。

## 第9講 日本の週刊誌文化について

—— weekly magazine culture in Japan ——

### ①話のエッセンス

日本人の大人が男女を問わず週刊誌が大好きで、しかも電車の中でそれを好んで読んでいるという現象の背後に潜んでいる、日本の週刊誌文化を作りだしている社会的要因を探り出し、週刊誌の社会的役割を明らかにすることが今回の話の狙いである。週刊誌文化を生み出しているのは、

ア．日本人全体の高学歴化と識字率の著しい高さ、

イ．都市化と地価の高さによって生じる職住分離に伴う長時間通勤と長時間通学のサラリーマン、OL、大学生が多数派を占めること、

ウ．個体間距離とパーソナルスペースを相互に侵害される通勤・通学の電車内に於いて、人為的にパーソナルスペースを確保する為の心理的防衛策として社内読書が必要であること、

エ．社内での同僚間のコミュニケーション・トピックスのデータ・インプットの必要性の存在と、

オ．日本人は実に好奇心が強い国民性を持っていること、

等の大きく5つの理由が考えられます。

## ②キーワード

新聞（しんぶん）、スポーツ新聞（しんぶん）、週刊誌（しゅうかんし）、サラリーマン3点（てん）セット、識字率（しきじりつ）、基礎的常識（きそてきじょうしき）、高学歴社会（こうがくれきしゃかい）、義務教育（ぎむきょういく）、重化学工業（じゅうかがくこうぎょう）、家庭電気製品（かていでんきせいひん）、自動車（じどうしゃ）、第一次産業（だいいちじさんぎょう）、第二次産業（だいにじさんぎょう）、都市化（としか）、片道（かたみち）1時間以上（じかんいじょう）、時間潰（じかんつぶ）しの元（もと）、寝（ね）たふり行動（こうどう）、人工的（じんこうてき）パーソナル空間（くうかん）、他人（たにん）の視線（しせん）、付（つ）き合（あ）い、協調性（きょうちょうせい）、コミュニケーション・トピックス、好奇心（こうきしん）

留学生の皆さんの中には、電車に乗って大学に通っておられる方々も多いと思いますが、朝の電車の中では新聞を読んでいる人々が多く見られますが、帰りの電車の中では週刊誌やスポーツ新聞を読んでいる人々が多いことに気がつかれていると思います。駅の中の売店、物を売っているお店をキヨスクと言いますが、あのお店の一隅には実に多くの種類の新聞と週刊誌が売られていて、それが次々と売れていることは、少し注意深く観察すればすぐに分かることでしょう。サラリーマンのお父さん達は、帰りの電車に乗り込んでくる時に、大抵の場合缶ビールとおつまみ（酒をのむときに一緒に食べるもの）と週刊誌かスポーツ新聞を持ってきます。これを「サラリーマン3点セット」と言う人もいます。週刊誌にはお父さんサラリーマンの読む男性用週刊誌と、女性向けの週刊誌とFocus、Friday、Flash という写真週刊誌もあり、これほど多種多様な（違った読者ごとのたくさんの）週刊誌が読まれている国は世界広しと言えども日本だけでしょう。それは一体なぜなのかを今日は考えてみましょう。

実は今話している私自身週刊誌大好き人間で、『週刊朝日』、『週刊文春』、

『週刊新潮』、『サンデー毎日』、『週刊読売』、『週刊現代』、『週刊ポスト』の7種類を毎週欠かさず読んでいて、必要な記事はファイルして保存しています。さらに相撲取りの若乃花スキャンダルやタレントの松方弘樹の離婚騒動の時には女性週刊誌も買って読みましたから「ミーハーおっさん」そのものです。ですから私は日本の週刊誌文化を外側から見るのではなく、自分もその中にどっぷりと漬かり、自分の経験を客観化する努力をしながら解き明かしていく努力を以下において行なってみましょう。

まず週刊誌があれだけ大量に売れている第一の理由は、ひらがなやかなりの数の漢字そしてカタカナ表記の外国語を殆どの日本人が読むことができ、理解することができるという「識字率」の高さと、**基礎的常識**の高さです。その2つの能力の高さは、日本人の殆どが高校を卒業し若者の2人に1人近くが大学に通うという意味で「**高学歴社会**」であることと、小中学校の「**義務教育**」の教育成果の高さと均質性とから生まれていると言えるでしょう。義務教育の教育成果の高さをより強化しているのは、高校進学のための入学試験の全般的激しさと、学校外補習教育（通信教育、学習塾と家庭教師）の充実と高い利用度です。さまざまな要因が絡み合って、**高い読書能力**を第2次大戦後の平均的日本人が持つようになりました。

第2次大戦直後の日本経済は、鉄鋼業や造船業という**重化学工業**が大きく成長し日本経済は急成長してきました。そのような生産財中心の経済成長の後に日本経済のエンジン役となったのは一般消費者が買う**家庭電気製品**や**自動車の産業**でした。それはまた日本が農業・漁業・林業の**第一次産業中心**の経済社会から工場生産中心の**第二次産業中心**の経済社会へと変化した時代でもありました。大きな工場は港の近くに建てられてそこには多くの労働者が農村部から集まってきました。会社勤めの雇用労働者（いわゆるサラリーマン）が労働者の大多数を占める国へと日本は急速に変化してきました。工業を中心とした**都市化**が起り、巨大都市の周辺には多くのベッドタウンが生まれ、職場から離れた所に家を建てて通勤する人々が増えました。都市の土地の値段は、住宅地が少なく人口の多い日本ではどんどん高くなりましたか

ら、家を建てるサラリーマンの人々は職場から遠く離れた所に家を建てるしか方法がありませんでした。現在小山市や宇都宮市から新幹線で東京まで通勤する人々が実に沢山います。東京都内の会社へ通うサラリーマンの半数以上が片道1時間以上かけて通勤しています。OLについても事情は大きく変わりませんから、会社勤めの多くの人々は長い通勤電車の中で寝過ごしては遅刻してしまいますから何か「時間潰しの元」が必要不可欠となります。朝の電車の中はとにかく仕事に疲れた帰りの電車の中では肩の凝らない週刊誌やスポーツ新聞は必需品になると言えるでしょう。

昼間のすいている電車に乗ると、乗客は4人がけの座席にそれぞれ1人ずつ乗っている場合が多いことと、電車の両側に長い座席のついている電車の中では目をつぶって寝ている人々が多いことに気がつくと思います。初めて日本に来た外国人の人々が、電車の中で寝ている人の多いことに驚いたと言います。ある外国人研究者は、なぜそうなのか論文にまとめました。私も含めて日本人の多くの人々の電車内の行動から言えることは、私達は他人がその中に入ってくるのをいやがる私だけの空間（パーソナルスペース）を持っていて、それがすいた電車内でできるだけ他人と離れて座りたいという行動をとるのだということです。第2に日本人は他人と視線を合わせることを余り好まない傾向があり（視線恐怖と言います）、それが電車内での「寝たふり行動」を生みだしているのでしょう。混んだ通勤・通学の電車の中では、パーソナルスペースに否応なく他人がお互いに入り込むこととなり緊張感が高まり他人の沢山の視線にもお互いさらされることとならざるをえません。混んだ電車内で人工的に自分のパーソナル空間を創り出し、他人の視線をさえぎる為の小道具が新聞と週刊誌なのです。電車と週刊誌と新聞は切っても切れない関係なのです。

日本の会社では、仕事前や昼休みそして仕事の後にも社員同士でお茶を飲んだり一緒に食事をしたりお酒を飲んだりと様々な「付き合い」が欠かせません。日本の会社員に必要な資質に「協調性」があり仲間と仲良くできなければなりません。子供の世界の付き合いに、テレビのアニメーション番組や

人気のあるマンガやテレビゲームに詳しいことが不可欠のように、サラリーマンやOLの世界の付き合いでも誰でもが平等に参加できる「コミュニケーション・トピックス」が必要で、スポーツ新聞や週刊誌の話題がその格好の材料を提供してくれます。家族などのプライベートな話題は話すことも聞くことも余り好まれませんので、それ以外の話題が必要ですが忙しくテレビもゆっくり見られないお父さん達には週刊誌ネタやスポーツ新聞ネタが不可欠だと考えられます。

文化人類学者の鶴見和子さんの本に『好奇心と日本人』（講談社現代新書）という本がありますが、その本の中で日本人が大変**好奇心**の強い民族であることがいろいろな具体例を示しながら述べられています。高名な俳人松尾芭蕉にも「秋深し隣は何をする人ぞ」という人恋しさと好奇心に溢れる句がありますから、日本人は他人の行動が大変気になるという意味で好奇心が旺盛なのです。私が7種類もの週刊誌を毎週読んでいるのも私の好奇心が大変強いからです。

## 第10講 日本語の話し言葉としての特質と赤ちゃんとの関係について

### ①話のエッセンス

日本語の特質は、そのことばの表記上の特色、つまり読むことと書くことについての特色と、ことばの音声的表現としての話し言葉の特色の2つがあり、ともに学習することはかなり難しいと思われます。その証拠は、高校入学試験の国語の問題が普通の人にとりかなり手強いことと、現在大学生の読み書き話すという日本語能力の低下とに明らかでしょう。

話し言葉としての日本語が難しいのは、水平的人間関係における心理的距離に応じて3つの言語レベルを瞬間的に選択することの難しさという面と、垂直的人間関係における敬語の3つのレベルを瞬間的に選択することの難しさという2つの面があります。

日本のサラリーマンのお父さん達の多くは世界でも類を見ないほど長時

間会社で生活しています。その中でお父さん達は頭の中で6つの言語レベルを次々と飛び回らなければならず、頭はオーバーヒートし大層疲れストレスがたまらざるをえません。お父さん達は「心の疲れを癒し」、垂直的人間関係の中では発言できなかったことを「吐き出す」場が必要です。そしてそこでは垂直的人間関係が水平的に変化するマジックが必要でそれがアルコールのある空間なのです。サラリーマンのお父さんが赤ちゃんで一杯やるのは生活の知恵と言えるでしょう。

## ②キーワード

あいうえお、発音（はつおん）、1対（たい）1対応（たいおう）、音読（おんよ）み、訓読（くんよ）み、漢字（かんじ）かな混（ま）じり文（ぶん）、読（よ）み書（か）き、話（はな）し言葉（ことば）、話（はな）しのコンテンツ、表現方法（ひょうげんほうほう）の多様（たよう）さ、水平的人間関係（すいへいてきにんげんかんけい）、心理的距離（しんりてききょり）、丁寧語（ていねいご）、普通語（ふつうご）、ぞんざい語（ご）、垂直的人間関係（すいちよくてきにんげんかんけい）、敬語（けいご）、尊敬語（そんけいご）、謙譲語（けんじょうご）、言語（げんご）レベルの瞬間的選択（しゅんかんできせんたく）、赤（あか）赤ちゃん、居酒屋（いざかや）、酒（さけ）の席（せき）の失礼（しつれい）、人間性回復（にんげんせいかいふく）

留学生にとって日本語は大変難しいと思いますが、実は私達日本人にとっても日本語は大変難しいということを今日はお話しして、そのような難しい日本語の世界で生まれるストレスを解消する1つの方法が「赤ちゃん（安価な酒場）」での「ノコミュニケーション」である、ということを知りやすくお話ししてみたいと考えています。

## 1. 日本語のやさしさとむずかしさ

日本語は耳で聞いたことばを、ひらがなやカタカナで書き表わすことは英語に比べると実にやさしい言葉です。それはなぜかと言えば、日本語には母音が5つしかないことと、あいうえおの50音は、いくつかのごく少数の例外を除けば（へとえ、おとを、はとわ等）ひとつの音とひとつの文字が「1対1対応」をしていますから、耳で聞いた音通りに書き表わすことが可能なのです。このひらがなやカタカナの組み合わせで日本語ができています。しかしながらそれだけ（50音のひらがな）で、自然や社会のすべての現象や活動を表わす言葉を分かりやすく書き表わすことはできません。そこで日本人は漢字を大変上手に組み合わせるようになったのです。中国から輸入してきた漢字は、中国語風の発音（音（おん）読み）と意味とを利用して漢字を複数組み合わせた言葉を沢山作り出すことに利用され、他方において日本風の発音（訓（くん）読み）と意味を与え利用することを考え出しました。その結果日本語は、「漢字かな混じり文」となり、漢字の読み方、書き方、そして意味とに対する大量の知識を持たないと読んで理解することも書くことも難しい言葉となりました。意味が分からなくとも耳で聞いた言葉をひらがなに移し替えて書くことは小学生でもできますが、漢字かな混じり文を読んだり書いたりできるようになる為には長期間に渡る学習とトレーニングとが必要不可欠で、私達日本人の平均的な大人にとっても決してたやすいことではありません。

日本語は読んだり書いたりすることもかなり難しい言葉ですが、「話し言葉」としての日本語はより一層難しい使い方のルールがあって、それを飲みこんでないと会話がきちんと成り立ちません。話し言葉のルールは、「話したい内容」とそれを伝えるための「言葉的表現」の間には、話し手と聞き手との関係の違いに合わせて「多様な対応関係」が存在している、というものです。つまり私達日本人が話しをする場合は、相手（聞き手）と自分との「関係の在り方」に応じて、話したい内容をその都度頭の中で瞬間的に翻訳し最もその場にふさわしい「言葉的表現」として会話しなければならないの

です。このことは、年をとっても中々うまくなることは難しく（家庭と社会の中で、モデルが少なくなっているとともに、自発的・意識的トレーニングが必要不可欠ですから）、私どもの大学の学生の大多数は、日本語の話し言葉によるコミュニケーション能力が大変乏しいと、私のこれまでの観察から断言できます。

## 2. 日本語の話し言葉のむずかしさ

日本語の話し言葉のルールの第1は、**丁寧（ていねい）語、普通語、そしてぞんざい語**の3つの言語レベルが、年齢や社会的地位がほぼ等しい（水平的人間関係）場合においても、話し手と聞き手の人間関係の親密さの程度、これを難しく言うと**心理的距離（psychological distance）**の長短の度合いに応じて、瞬間的に判断して会話が行なわれなければならないというものです。話し手と聞き手の間に存在している見えない心理的距離よりも、近づき過ぎた言語レベルを話し手が間違えて選択すると、「慣れ慣れし過ぎる」という反応が聞き手から返ってきますし、その逆に遠過ぎると「よそよそし過ぎる」、「他人行儀は止めて欲しい」という反応が聞き手から返ってくるようになります。2人の間の心の距離、心の近さを微妙に測りながら会話が行なわれなければなりませんから、内容の選択に加え、かなりの「精神的緊張」、「ストレス」を伴うのが日本語の会話だと言えるでしょう。

日本語の話し言葉のルールの第2のものは、年齢や社会的地位が違う「**垂直的人間関係**」に於いては、聞き手を高めて使う「**丁寧語**」と、話のトピックスになっている動作や状態の主体を話し手が高めていう「**尊敬語**」と、話のトピックスになっている動作の主を低めて、その動作の関係する主体を高める「**謙譲語**」があり、丁寧語は尊敬語や謙譲語と結びついて使われ、聞き手を高める働きをします。この3つの言語レベルを自由に使えるようになると「**敬語が使える**」と言えますが、実は私のような中年の社会人にとっても決してやさしいことではありません。それはこの3つの言語レベルを瞬間的に使い分けていくことが難しいという側面と、もうひとつ話し手が聞き手と



自分との間の上下関係を確定することが、相手に対する情報の少ないかほとんどない場合には、中々難しく言語レベルを選べないということが起こりがちだという側面があるからです。日本社会に於いて初対面の人同士が名刺を出し合うことのひとつの働きは、お互いの間の上下関係を相互に確認し合いその後の会話をスムーズにしていくことだと考えられます<sup>(注1)</sup>。私自身は20代後半になって初めて英会話の勉強をして、ブロークンながら少し話せるようになりましたが、発音や文法や単語力の貧弱さという問題は当時も今もついて廻っていますが、話す時に言語レベルを選択しなければならないという困難はほとんどありませんから、話すという面では英語の方が言語発信の操作はやさしいと言えるような気がしています。

日本のサラリーマンは会社の中の上下関係と、取り引き先やお客様からの電話や面談で言いたいことと、その場にふさわしい言語的表現とを瞬時的に選択することを、何度も相手を変えて行なうのですから、強い緊張感とストレスが毎日積み重ねられることは、容易に想像することが可能でしょう<sup>(注2)</sup>。

### 3. ストレス解消と垂直的人間関係の解消の場としての赤ちょうちん

緊張感とストレスはどこかで上手に発散させ、心をリフレッシュさせないとサラリーマンは「心の病気」にかかってしまいます。そこでお父さん達は、赤ちょうちんや居酒屋でアルコール飲料を飲んで発散するのです。日本には「酒の席の失礼」は大きくとがめられず大目に見られるという社会的な暗黙の了解がつい最近までは強力に存在していましたから、心を裸にして垂直的人間関係を水平的関係に引っくり返してお父さんは**本音のトーク**をすることによって「**人間性回復**」を図っていくことに、お父さん達の赤ちょうちんノコミュニケーションは役立ってきたのでしょう。

（注1）「名刺交換」の効用は、会話の際の言語レベルの選定を容易にすることのみにはとどまらない。相手の所属企業や所属部署、肩書きに対応して最も適切な話題を選び出す「トピックス選択機能」も名刺交換の効用で

あろう。名刺には、その所有者（名刺を出す人）に対する「社会的信用付与機能」と、その所有者の「社会的承認欲求の充足機能」という効用もあると思われる。人は名刺を出し相手の反応を見て満足感を高める場合（その逆の場合もあるが）もある。

（注２）サラリーマンのお父さん達のストレス原因が日本語によるコミュニケーションに於ける「過剰配慮（overconsideration）」のみであるということは、話を分かり易くするために意識的に過度に単純化（oversimplification）されていることは、本稿をここまで読まれた方には容易に察しうることと思われる。

日本のサラリーマンが、赤ちょうちんに代表される酒席に於いて、対人的交流に励まなければならないのは、１つは交際費という摩訶不思議な「会社の金」を使って「接待」という名目で自らも「タダ酒、タダ飯」が飲食できるという慣行が広く行なわれているからでしょう。高級官僚の世界であれ、大企業、中小企業であれ、上から下まで「接待」には酒が付き物だからです。

第２の理由は、日本の会社の中での仕事の進め方の特質に由来しています。日本での仕事は、個人に明確な質と量が規定されて与えられるのではありません。仕事は部や課や班という「小集団」を単位として与えられ、集団メンバーが相互に協力して遂行されるのが通常であり、各個人の仕事内容はかなり「あいまい」な状況で仕事が行なわれていくのです。そうするとお互いの「イキが合う」ように常日頃から「同じ釜の飯」を食べ集団としてのまとまり（集団凝集性）を常に高めることが行なわれ団結心の確認の「儀式」が必要にならざるをえないでしょう。

第３の理由は、日本の仕事の進め方との関連で上司と部下にある種の人間関係の形成が必要とされるからです。上司は小集団（チーム）での協調してスムーズな仕事の進行を可能ならしめる為に、部下の１人１人の性格の違いや能力の特色や、心身のコンディションや家庭状況をきちんと把握しておくことが必要になります。部下の１人１人の抱える問題の解決に手を貸しながら

ら、彼らの労働意欲を高め、集団での仕事をうまく推進していくためにも、赤ちょうちんや居酒屋のコミュニケーションは重要な行事となります。酒が入ると悩みはずっと打ち明けやすくなるのが人間社会の一般的な現象だと言えるのではないのでしょうか。

### 3-3 『泣いた赤鬼』をどう読むか

#### 資料 第1回目（98年度）学生の感想の一部分（学生の書いたまま）

##### 学生A

赤鬼が心配して青鬼の家へ行くと、文字が書かれ、青鬼は赤鬼との付き合いがばれないように旅に出ました。青鬼は赤鬼のためにぎせいになり、本当の友達でした。赤鬼はその事を知り、うれしくて、泣きました。

##### 学生B

この童話を読みおわって、私もこのあおおにの行動に感動されました。友達が幸せになるため、自分が犠牲しました。そんなえらいことをするのが人間のなかにも少ないわけ、誰でもあおおにみたいな友達がほしがってるはず、それこそ、ほんとうの友達でしょう。赤鬼は青鬼みたいな友達にあえないから、泣いたでしょう。

##### 学生C

赤鬼は人間と仲良くしたいと考えていた。親友である青鬼が赤鬼のため、悪人の役目として犠牲になった。ほんとに心が優しい青鬼は友人のため、骨をおった。かえって赤鬼が一番信頼する仲間が失ってしまった。この物語には青鬼はいい鬼と言える。世の中に友達を区別していい仲間を得るのは難しい思う。

学生D

ところが、1日に偶然青鬼に会って、良い友達になった。この青鬼はたくさん人間の友達を紹介してあげた。それで、赤鬼がころからとても感謝いたし、みんなといっしょに幸せに生活している。あいにく、最後まで、赤鬼が青鬼とわかれて、遠くところへ行きました。これ以上の内容です。

学生E

赤鬼は感動な気持ちを抱えて、青鬼の所を訪ねたが、青鬼はいなかった。きわにはり紙は「自分が君と会えば人間にきらわれるからどこか遠い旅に出る」と書いていた。赤鬼は自分を犠牲にして、つくしてくれた青鬼になにも言えず行ってしまったことに対して、**同情と寂寞で泣いたのだと思う。**

学生F

ところが、赤鬼と人間たちとのうまく付合うために考えて、青鬼は旅にでることにしました。というわけで、赤鬼が青鬼に恩を返すことができなかった、また、他人のことばかりを考えている青鬼と本当の友達になれないことで、赤鬼は心が苦しめて、泣いてしました。

学生G

それで赤いおには人と中よくできましたがそのあとから青いおには赤いおにのうちに来ませんでした。それが心配になって青いおにのうちにいった赤いおにはともだちのやさしさがいっぱいはいっている手紙を見ました。このままつきあうとにんげんにうたがうから自分は旅行いくということ。ともだちのやさしいきもちに感動した赤おにはなみだをながしました。

学生H

しかしそこ時から青鬼はまったく赤鬼のうちに遊びに来なかった。赤鬼はしんぱいが出来て青鬼のうちにきて見た。青鬼のうちにいったが青鬼はいな

くて手紙が書いておいた。青鬼は自分がずっと赤鬼の友達になっていったら人間と赤鬼の関係が悪くなるおそれがあるから長い旅び行ってしまった。赤鬼は青鬼の心に本当にあったいきもちをもってうちにもどって来た。その帰る道で赤鬼は友達の青鬼に**すまない事とありがたい事**でなみだを泣くながら帰ってきた。

#### 学生 I

そして、赤鬼は泣きました。青鬼の**偉い行動に感動して**、友達が幸せになれば、自分はどうなってもいい。これはほんとの友達ですから、赤鬼は泣きました。また、一人の大切な友達がなくて、かなしくて泣きました。

#### 学生 J

この童話を読みましたが、私は頭の中でいろいろ考えものをできた。私たちは、外国人として、日本の国も他の国も本国の国民たちとがんばってなかまになって他国の習慣がなれて、たのしい生活をくらしめます。

日本事情Ⅰ用資料（1999年4月23日配布）

白鷗大学経営学部教授

柳川高行

## 1. 赤鬼はなぜ泣いたのでしょうか

（柳川によるひとつの解答）

私は赤鬼が泣いたのは、3つのそれぞれ違った理由が合わさったからだと思います。

まず第1に、青鬼が、自分が赤鬼と仲良くしていきたいという気持ちを殺して、赤鬼の村人達と仲良くなりたいという気持ちを大事にして赤鬼の為に「悪い鬼」の役を演じてくれたことに対する「感謝の気持ち」と「済まないという気持ち」から泣いたのでしょう。

第2に、赤鬼と村人達の友情が壊れないように青鬼は住み慣れた土地と家とを捨てて旅に出なければならなかったことに対する「申し訳ないという気持ち」と青鬼にそうさせてしまうことに前もって気付かなかった自分の愚かさに対する「腹立ちと情け無い気持ち」から泣いたのでしょう。

第3に、本当に自分のことを思ってくれる一番大切な友人を、村人と仲良くなる替わりに失ってしまったという「喪失感」ともう二度と会うことができないという「絶対的な別れの悲しみ」から泣いたのでしょう。

## 2. 山口百恵さんはなぜ三浦友和さんに魅かれたのでしょうか

（柳川によるひとつの解答）

山口百恵さんのよく知っている芸能界という世界は、取り繕う世界、心にもないことを言う世界、ウソを付く世界であり、周りの大人達の期待に添った演技をする世界でありました。そんな虚構（ウソっぱち）の世界の中で、ウソを付くことなく誠実に生きている珍しい人が三浦友和さんでした。この人ならどんなことがあっても愛する人を裏切ることがない人だと「絶対的信頼」の対象となりうる人との出会いを彼女は直感的に感じたのでしょう。このような出会いは砂漠の中に落とした1粒の真珠ともう一度出会うことに近

いくらい奇跡的であると彼女は認識していたに違いありません。人気も栄光もそして巨額の収入の全てを捨て去ってこの人と共に生きて行こう、そうすれば自分（百恵さん）の**理想とする家庭が築ける**ということを20歳を過ぎて間もない若い彼女が気がついたことは驚異的であります。

### 3. 城山三郎氏の「晴れた日の友」は何を考えさせてくれるでしょうか

（柳川によるひとつの解答）

私は友達には大きく2つのタイプがあると思います。

#### ①晴れた日の友（a fair weather friend）

成功している人・地位の高い人・お金を持っている人・付き合い得をする間に対しては大変いい友人としてチャホヤとしてくれるが、一旦その人の状況が悪く変化すると、手の平を返したように態度が変わり、鼻も引っかけなくなる人のことを言います。

ある会社の社長さんが会社の中の社長レースで上のエレベーターに乗っている間は、我先に乗り込んできた人々が、一旦エレベーターが下がり出すと（出世レースからはずれると）真先に逃げ出していくような人々であり、本当の心の友には決してなりえない人のことです。

#### ②雨の日の友（a rainy day's friend）

社会的地位の上下や、学歴のあるなし、金持ちか否か、利用価値があるかどうかに関係無く、全ての付帯条件（アクセサリー）を取り去った裸の私と生涯変わる事無く付き合いってくれる人で、変わらぬ友、真実の友、本当の友のことです。

友人は、家族と並んで人生の素晴らしさとそして人間関係の難しさをともに味わせてくれるものです。友人の数の多さを誇る人々や重視する人々も世間にはたくさんいます。それはひとつの考え方、価値観ですから絶対に正しいとか誤っているとか決めつけることはできません。私個人は自分の経験してきたことや観察してきたことから次のように考えています。人生にお

いては本当の友人というのはそんなに多くは必要ないと思います。池に小石を放り込むと、石を投げ込んだ箇所を中心に輪がいくつも同心円状に広がっていきます。私達と友人の間もこの同心円のように心の近い人から遠い人々まで何通りにも分かれるような気が私はしています。心の距離の近い人、もう一度生まれてきても是非もう一度友達になりたいという人はそんなに多くないと私は思っています。人数は少なくとも掛け替えのない友人に恵まれることが、多数の普通の友人達に囲まれるよりも幸せなことだと私は信じている者です。



## 資料1 蒼い時

集英社文庫 昭和56年4月25日 第1刷

昭和56年9月30日 第10刷

時折、窓をたたく雨の音を聞きながら、ふと私たちの婚約発表の日のことを思い出している。あの日も、私の願いを裏切って、激しい雨が朝から降り続いていた。

三月七日。

あの日の雨は、まるで私に、これからの人生が決して容易ではないことを、重い口調で告げているかのようなだった。すぎるほどの緊張感の中で、微笑む彼の存在の大きさをあらためて胸に刻みながら、私は彼を見上げていた。

三浦 稔。二十八歳。

彼との出逢いは、六年前。

十五歳、まだ頬のあたりに、ふっくらとした幼さを残したままで、私は彼に出逢った。五月晴れとはいえ、東京の空は決して青くはなく、鈍色に輝く光りの中。

C Fの撮影のため、<sup>きぬた</sup>砧の緑地公園に来ていた。スタッフと待ち合わせた時間には少し間があり、制服を着たまの私は、車の中にいるのが嫌で車外へ出た。特別、気持ちがよいといった空気ではなかったが、密室から解き放たれた自由を、私は思いきりかみしめていた。

その時、私は視界の中に一台の白い車を認めた。私の乗っている車からそう遠く離れてはいないその車から、ひとりの青年が降り立った。ブルーのトレーニングウェアに身を包んだその人と一瞬目が合った。しかし、お互いに挨拶を交わすでもなかった。緑地公園にトレーニングに来ているスポーツ選手という印象を持った。即座にそう思えるほど、彼は健康的だった。

しばらく間があって、スタッフから紹介され、挨拶を交わした。「よろしく」別に笑顔も作らずに、彼はそのひと言だけを置き去りにした。

撮影が始まって私たちはほとんど言葉を交わさなかった。私は彼に対して、それまで決して出逢ったことのない世界を感じていた。軽はずみな笑い

声など一切たてず、落ち着いた声で話すその人の<sup>とつとつ</sup>訥々とした語感が新鮮だった。それまで「山口百恵さんです」と紹介された途端、必ずといってよいほど、相手の笑顔が返ってきた。内心の戸惑いとは別に、私も笑顔を作らねばならなかった。

恋のはじまりは、意外性の発見から——と誰かが言うのを聞いたことがある。私の場合もそうだった。彼は、私の目にはあきらかに他の人たちと違って映った。初対面のぶっきらぼうな態度に、私は肩すかしを喰わされ、そして、それが少しも不快ではないことに、驚いていた。

彼は、彼の全てを偽ることなく生きていた。それにひきかえ、私のほうは無意識にタレントという習性が身につきはじめていたのか、偽らざるを得ないことが多かった。

『潮騒』という映画のロケーションのため、神島という小さな島に渡った。そこで私たちが到着した翌日、克蘭クインの記者会見が行なわれた。記者のひとりが、私たちに尋ねた。

「神島の人たちと接してみて、どうですか」

私は、それまでの仕事の中で、旨く答えることだけを訓練されている。

「ええ、とても暖かくて、素敵な方たちですね」

続いて彼も答えた。

「イヤ、僕は……まだ一日や二日じゃ、わかりません」

胸の奥に痛みを覚えた。いつの間にか、その場だけを取り繕うことをしすぎて、本当のことを言う作業をしていない自分を恥じた。

この映画に入るまでに、私たちはすでに『伊豆の踊子』という映画でも、共演していた。しかし、私は親しく話をすることができなかった。私の中で七歳という年齢差が、大きな壁となって立ち塞がっていた。彼は、私の世界などに何の興味もない大人だった。それに、何よりも、当時の私は忙しすぎた。時間で一日を区切られ、次の行動に移る時のキッカケは私自身の決断ではなく、全て、タイムリミットであった。眠ることさえ自由ではなかった。移動する車の中で睡眠を補充していた私は、仕事の現場についても目覚めら

れないことがしばしばあった。

彼の声が聞こえた。

「眠ってんのかァ。可哀そうになア、疲れてんだろな」

窓の外の足音が遠のいて行き、ぼんやりした意識の中で、その言葉だけが心に残った。

いつの間にか私の目は、彼を追うようになっていた。同じ年代の共演者たちと話す時の彼の笑顔、声、言葉、全てを追いながら、無邪気に溶け込めない自分がたまらなく口惜しかった。何故なのだろうかと、何度か自分に問いかけてもみたが、考えれば考えるほど自分の心がかたくなになっていくような気がした。

やがて、仕事を重ねるにつれ、少しずつ言葉を交わせるようになり、時には軽口を叩き合ったりもできるようになっていった。だが、もともと会話を得意としない私にとって、それは苦痛でもあった。せっかく話をしても話が持続しない。自分が発した言葉を反芻してみると、面白くないことばかりを言っている。二人の会話はいつも簡単に途絶えてしまった。それは、どこかで、もうすでに彼をひとりの異性として意識していた自分に対する、ひとりの女としての自信のなさでもあった。

初めて仕事をした日から、私は彼を「三浦クン」と呼んでいた。まるで学校の友達を呼ぶような気軽さだった。しばらくの間は実際、何の意識もせずあたり前のようにそう呼べていた。だが、ある日突然、彼を「三浦クン」と気軽に呼ぶことにためらいを覚えた。

七つも年下の私が「クン」づけで呼んだりしてはいけない、そんな気持ちも確かにあったが、それよりも、気持ちの内側で、私はもはや、名前の下にどんな呼称をつけても、彼の名前そのものを口にすることに、かすかなためらいを覚えるようになっていた。

そうしている間にも、コマーシャル、『伊豆の踊子』、『潮騒』、『絶唱』、テレビドラマ……、いつの間にか私たちは、ゴールデン・コンビと呼ばれるようになっていた。私たちは、毎日の生活時間のほとんどを共にしていた。親

や妹と顔を合わせるよりも多くの時間、彼と共に仕事をしていた。情が移るという言葉で表現されてしまうのは私自身、あまり嬉しくないが、たくさんの時間を共有するうちに、初め「兄さんのような人」という気持ちが変わりながら違う方向へ走っていくのは感じていた。

晴海埠頭のロケーションがあった時だった。彼の胸に顔を埋めるシーンで、厚手のセーターを通して、私の耳に響いてくる彼の鼓動を聞きながら、「この鼓動を特別の意識を持って聞くことのできる女性……私になれたら」と思った。

それは、まぎれもない、恋の実感だった。

資料2 城山三郎、1985年、「晴れた日の友」、『打たれ強く生きる』

日本経済新聞社、221-223ページ。

晴れた日の友

銀座を歩いていて、「シロヤマー！」と大声で呼びとめられた。

わたしは、二重にびっくりした。呼ばれたことだけでなく、そうした呼び方をされたということに。

呼んだのはだれかと思うと、中学同期のB君であった。わたしは首をかしげた。

わたしを本名で呼びすてにするのは自然だが、なぜペンネームを持ち出したのか。

というのも、わたしはペンネームであるこの名前を最初に使った作品で受賞し、すぐ作家になったからで、B君とは呼びすてで、つき合う期間など全くなかった名前だからである。

B君から電話がかかってくると、今度は家人が首をかしげた。

「シロヤマは居るかって。Bさんって、よほど、えらい人なの」

B君は、建築事務所につとめている。そこから電話してくるとき、とくにそういう呼び方をする。

要するに、城山を呼びすてにする関係にあるということを見せたいのであろう。

持ち上げられるのは、もっと困るが、こんな風に不当に親しくふるまわれるのも、考えてしまう。変わらぬ友がいちばんいい。

B君は中学で同期ではあったが、クラスもちがい、ほとんどつき合いはなかった。彼が親しくしてきたのは、わたしが作家としてデビューした後である。つまり、「晴れた日の友」である。

B君だけのことではない。

政界の実力者を囲む財界人の会なども同じで、その人が総理確定となると、会のメンバーが一気に数倍ふくれ上がる、という。

鈴木健二さんの言葉を借りるなら、

「井戸を掘っているときは助けにも来てくれなかったくせに、水が出たとなると、わっと寄ってくる」

それが多くの人情なのであろう。

その辺のところを、さめた目で見たと、「晴れた日の友」とつき合うべきである。

中学時代、本当に親しかった仲間とは、いまも本名で呼びすてというつき合いをしている。

先日、そうした友人であるO君から、電話がかかってきた。

わたしが新聞に書いた随筆が何か淋しそうだ。元気か。会いに行きたいが、時間がないから、電話した——というのだ。

電話ぎらいのわたしだが、この一本の電話はありがたかった。これこそ、本当の友情なのだ。O君は、がらがら声で、豪快な人物。だが、そうした思いやりを忘れない。

こうした友の居る限り、たとえこの世で少々の打撃を受けることがあろうと、打ちのめされてしまうこともあるまい。

持つべきものは真の友、とあらためて思った。

#### 4. 結びに代えて

##### ——日本事情教育・研究のイノベーションを目指して——

本論文は筆者にとり野心的な試みの第一歩である。なぜ野心的なのかと言えば、筆者の全くの専門外領域への新規参入の試みであると同時に、新規参入にもかかわらず「日本事情の教育と研究のイノベーション」を目指す試みでもあるからである。それは「盲蛇に怖じず」を地でいくような無謀な試みであるかもしれない。だが志高く掲げて果敢にチャレンジすること無く新しいことが生みだされることは論理的にも経験的にもありえない。

私が所属する大学は、「PLUS ULTRA（より遠くを目指して）」をカレッジ・スローガンにしている。私もはるか遠くの目標を目指して教育・研究のイノベーションを試みることにしよう。

#### （付記その1）

私はいくつかの偶然の重なりによって「日本事情Ⅰ」を担当することになった。私が留学生に対して関心を寄せるようになった最大の契機は、私が2人の子供の父親であることであった。私は本学の留学生の状況を見ながら、自分の子供達が同じような留学状況に置かれたとしたら、1人の父親としての私は怒り狂うと思われたことが最も大きい契機である。

もう一つの契機は、94年4月から1年間母校に「内地留学」し、実に大事にして頂いた経験をしたからである。母校であることと、大学の専任教員であるという私の立場があったから、大学側の対応に大きな作用を与えたという点を割り引いても、私がお世話になった「一橋大学産業経営研究所（現イノベーション研究センター）」の事務の方々も書庫の方々も実に親切であった。

本稿に於ける「はじめに」の箇所ですべての3つの契機と上で述べた2つの契機を合わせて考えれば、私が「日本事情Ⅰ」を担当するようになったのは

「偶然」の重なりのように見えながらも、「必然的」であり、「運命的」でさえあるのかもしれない。

私は夏休み中に本稿の第2章までをまとめ、1回ごとの教案を作ったが、それはとても心弾む経験であった。私は3年間講義を担当したら、「一冊の教科書を書ける」くらいの努力を傾注したいと思っている。今少しずつ準備をしている「経営学の入門書」よりも案外ずっと面白くなるような予感がある。特に童話と詩を教材にした部分では、毎日寝る前に子供達に読んで聞かせた父親としての経験が生きている。詩は上の子の国語の教科書に載っているものである。私は童話や詩も人生経験を積むことと年をとるとともに全く新しい意味が見出しうることを身を以て経験した。

さらに子供が成人する「60歳まで飛行機には絶対乗らない」と決心している私にとり、留学生と接触できる「日本事情Ⅰ」は、私にとっての内なる小さな「国際体験」である。9月21日からの講義を私はとても楽しみにしている。

この場をお借りして、留学生対象のカリキュラム改編にご尽力頂きました、薮田三千穂氏（教務委員長）、柿沼陽七郎氏（事務局長）、諸星のり子氏（教務部長）、島村志津夫氏（教務課長）、原田博氏（教務委員）の方々のご尽力に対しまして心より感謝申し上げます。また多数の参考文献・資料の購入と収集とにお骨折り頂きました図書館の皆様、とりわけ穴戸藤重氏、瀧島君子氏、菅野善子氏、篠崎京子氏の方々に對しまして深謝申し上げます。

本稿の第2章の殆ど全ては、妻の実家である茨城県下館市川島の家の茶の間のテーブルで書いた。実家に久しぶりに宿泊させて頂きながら、花火大会を見て、夜一緒にビールを飲む以外は、せっせと原稿用紙に向かう義理の息子を温かく見つめてくれる義父高行（偶然私と同名同字である）と、義母トシのお2人に心からの感謝を記すことをお許し頂きたい。

私ที่บ้านよりもずっと広く、物も少ない実家の中を我が物顔にキャンキャンと声を上げながら駆け廻る2人の子供高弘と誠恵は今年の夏休みも私の「元気の素」であった。海へ行き、ディズニーランドに行き、そして早朝



から並んでポケモンの映画を見て、開店前から並んでポケモンスタジアム（任天堂64のゲームソフト）を買った今年の夏休み前半、私は家族に励まされながら、論文を2本書き、学会報告の準備を行ない、新しく担当する「日本事情Ⅰ」の講義用ノートをきちんと準備し、ビジネス開発研究所が小山市から受託した調査の為に、工場アンケートの「アンケート票設計」を行なうという超過密スケジュールを何とか乗り切ることができた。妻智恵子と高弘と誠恵に夫と父親が心から感謝していることを最後に記すことをお許し頂きたい。

（1998年8月19日 49歳の誕生日に）

## （付記その2）

付記その1では、講義実施前の planning 段階での状況と心境とを記したので、9月21日以降に講義を何回か経験し、3章の一部を書き終えてからの doing と seeing 段階での状況と心境とを以下記しておくこととしたい。

第一に書いておきたいことは当然のことながら、**留学生の日本語の基礎学力**には大きなバラツキが存在していて、日本語による説明のレベルを決定し維持していくことは困難かつ大きな課題であることを改めて認識させられたことである。第二に書いておきたいことは、これも当然のことであるが、「**留学生の学習意欲**」には大きな温度差が存在していることであり、学習意欲を高めるモチベーションな教育方法を今後も模索していくことが必要不可欠であることを改めて強く感じたことである。第三に記しておきたいことは、前述の学習意欲の大きなバラツキの存在という現象の根底には、**留学生であるが故の「甘え」**が見られることである。この甘えは彼らの生得的、性格的なものではなく、留学生により親切でありたいという個別的には極めて妥当な教員1人1人の態度と評価とが彼らに「**学習された甘え（learned advantage）**」を体得させてしまったのだと思う。私の日本事情では、予め渡された教材を読んでそれについてレポートを書いてそれを持参してき

て授業中にそれを読み上げてもらい、私がコメントをして、授業終了時にそれを提出してもらうことが不可欠であり、学生にその準備をして授業に参加してもらうことが単位認定の前提条件である。

しかしながら欠席した3人の留学生在が、教材を私の許に取りに来てレポートを出すことを全くせずに次の授業に参加したので、「それはおかしい、やるべきことをきちんとやってから参加すべきである」と言い聞かせても、最初は私の言うことが理解できない様子だった。私は毎回提出してもらったレポートを全て読んで、次週に全体的或いは個別的にコメントをしているので、留学生諸君にも必ずレポートを提出してもらいたいと考えているが、それは彼らの大部分にとり意外かつ厳しい要求だったらしい。

私は現代日本における大学教育の最大の問題点は、楽勝科目の存在と形式的、セレモニアルな単位認定試験の存在とであると認識している。

きちんとした勉強や試験準備を殆どすること無く単位が手に入る「**単位の叩き売り (bargain sale of unit)**」を体験した学生が、「**学習性怠惰 (learned idleness)**」を身に着けることになるのは論理的必然的帰結であると思われる。自らの行為によって学生を spoil しておきながら、「うちの学生は勉強しようとしない」などと発言する教員がもしいるとするならば、それは「天につばする行為」以外の何物でもないと思う。

留学生1人1人に、大学卒業生の名にふさわしい知的能力と技術的能力と高い教養とを身に着けさせることは、留学生を受け入れている大学という**教育機関の当然の社会的使命の重要な一部分**である。社会的使命を十全に果たしていない社会的組織体は、**自己のレーゾン・デートル**を主張することは遂に不可能な事であることが忘れられてはならないだろう。

私自身の日本事情の講義計画の立案策定能力及び、講義実践能力とは、どんなにひいき目に見ても不十分の極みである。だが私の20年強に及ぶ教育経験から言えることは、**志高く掲げて**（私は白鷗大学の校歌のこの一節は大変好きである）、教育ドメインのデザインを絶えず微調整しながら改善し続けていけば、約10年程で思いもしなかった程の高みに到達可能だということで

ある。毎週毎週の講義の準備は、それ自体はごく小さなレンガを1個ずつ積み上げる作業によく似ている。だがそのレンガのひとつひとつはいつか見上げるような建物を造り上げることを可能にする「小さな一個」なのだと私は深く信じている。

後期になってから私は、週2回の経営戦略論や、経営学史Ⅱ、ゼミナールの準備に加え、ビジネス開発研究所の小山市からの受託調査、大学院開設準備、学外での各種の講演、そして学会報告の準備に文字通り忙殺されており、新しく始めた日本事情の準備は、毎週日曜日を1日当てる必要がある。そのようなわけで、毎週土曜日も日曜日も大学に仕事に出かける私は、必然的に家庭サービスを不十分にしかできない状態である。

家へ帰った私を待ちかまえて近よってくる2人の子供高弘と誠恵と、その日起こったあれこれを熱心に話しかける妻智恵子に対して、私は心の中で来年1月を過ぎれば少し時間が自由になるからそれまで申し訳ないががまんして欲しいとそっとわびている。2人の子供と妻に対してこの場をお借りして心からの済まないという気持ちを記すことをお許し頂きたい。2人の子供にはまだまだ理解できないかもしれないが、「意地を通す」という心の在り方が時として人間を強く動機づけることがあるのである。そんな父親の教育者としての<sup>きようし</sup>矜持をいつか2人の子供だけでも理解してくれれば私は大変嬉しい。

（1998年10月18日 大学ビジネス開発研究所特別研究室にて）

### （付記その3）

98年9月と10月の殆どを使って、まず留学生との間に「相手に心を開いて率直に自分の考えを話せるような雰囲気作り」を心がけた講義を行なう試みを行なった。出席常ならぬ学生も3分の1位はいたけれど、毎回出て熱心に話を聴いてくれる留学生の熱意に応え、私は毎回授業の最後に彼ら・彼女らに書いてもらう短いレポートの日本語を添削して毎週そのコピーを返却し、彼らの意見のいくつかに対する私のコメントを教室で話すという講義スタイ

ルをとるようになった。留学生の顔と名前も覚え、1人1人の字や日本語の間違いのクセや考え方のクセも少しずつ分かるようになり、私は日本事情Ⅰを今年度から担当して本当に良かったとそう感じている。

日本事情Ⅰを担当して改めて気付かされたことがある。毎回レポートを書いて提出してもらいその日本語を添削しながら、彼らの努力の跡を強く感じた。私も今必要があって1週間に原稿用紙10枚分位の英文を書いているが、これ程長期に渡って英語と付き合いながら外国語で文章を書くことの難しさは今も変わらない。留学生の日本語の文章を添削する度に僅か2～3年の学習でここまで書けるようになる為には、どれほど心の張りつめた努力が傾けられたのだろうかと思いの下がる思いがするとともに、英文を私もこの程度まで書けるように頑張らなくてはと強くモチベートされた。

さらに私は、いつも自分に問いかけ続けてきている問題（日本人の社会的に動機付けられた諸行動の動機付け要因の探究）を留学生向けに一層分かり易いストーリーとして再構成して話して、その話についての感想・意見・批判を書いてもらったが、留学生という立場からの意見・批判の中にはこちらがハッとするような斬新な見解があり、私はもう一度問題を考え直す貴重なきっかけを与えられた。

12月に入ってから私は、少し余裕ができて相変わらず朝6時頃に家を出る生活をしているが、夕食に間に合うように家に帰れるようになった。そんなに大層なご馳走が出るわけではないが、家族そろって夕食をとるというその「当り前のありふれたこと」の大切さと幸せを私はかみしめている。

（1998年12月14日 ビジネス開発研究所特別研究室にて）

#### （付記その4）

この日本事情Ⅰについての論文用草稿を最初に書いたのは、1997年10月28日であり、その後断続的に書き継がれ1998年の夏休みに集中的に準備稿が書かれた。98年10月と12月とに講義実践に基づいて小論が追加された。その後

まとまった時間が中々取れなかったので、3部の2節の一部と3節の一部と第4章とは1999年のゴールデンウィークによりやく書くことができた。足かけ1年7ヶ月程かかったことになる。念の為に一言付言すれば、第3章2節の教案の一部を実際に授業で取り上げた際には、やや分かりにくいと思われる日本語（専門語ばかりでなく日常用語も含めて）については、板書をして丁寧に何度も言い替えて説明するように心がけ、日本人の平均的學生を対象とした場合の3～4倍の時間を投じた。従って講義のコミュニケーションの側面に関しては十分な配慮を心がけたことをここに明記してお断りしておきたい。

私自身が自らの専門と遠く離れた「日本事情」という科目に関連して論文を書いた動機について簡単に触れておきたい。私立大学に於いては国立大学に比べて教官数に余裕が無いことと人件費を効率化しなければならないという私学経営上の配慮から、どうしても専門外の科目を担当せざるをえないことが多い。非専門の科目を短期的にピンチヒッターとして（悪く言えば穴埋めとして）担当する場合にはそうする必要はないが、長期間に渡って専門外の科目を担当しようとする（せざるをえない）場合には、最低限3本程度のきちんとした論文を書くことが、研究者としての良心の証（あかし）であり科目を受講する學生に対する最低限の礼儀であると私は考えている。大学院に於いて長年に渡って研鑽を続け研究成果を何本か書いて初めて、文部省の大学設置審からある1つの専門科目の担当を許されることを考えるならば、研究成果を伴わない科目担当は「無免許運転」に等しいことだと言っても過言ではないであろう。私自身に話を限定すれば、短期大学と大学に於いて私は「経営学総論」、「経営概論」、「経営学史」、「外書講読」、「演習」の審査に合格し、大学院では、修士課程に於ける「経営戦略論」と「研究指導」とで丸合を頂いている。公式にオーソライズされていない科目は、「商学総論」と「日本事情」の2科目であるが、前者に関しては著書と多数の論文とがあるので、後はまだ「仮免状態」の日本事情についてきちんとした研究成果を出すことが私の残された責務であると考えられる。私にはあと2本の論文を

書けば心の負債を返済することが可能となる。

話は大きく変わるが、付記その1、その2を書いていた昨年の夏休みから秋までの時期の私の心の中には、「激しい憤（いきどお）り」が渦巻いており、その怒りをエネルギーにして執筆が行なわれたのが事実である。怒りの原因の生じた日々から1年半くらい経って少し落ち着いてきた私は、そんな方々に腹を立てても事態は何も変わりはないと思うようになった。過去と**職業的誠実さ**のかけらも無い大人の他人とを変えることは不可能事であることは古今東西の真理であろう。だがそう考える一方で、**不正を憎み、職業的義務の放棄**を許せない私自身の**正義感**を、それが青くさく寛容さに欠ける点があっても今後も変わることなく持ち続けたいと思う。高校生の時の恩師である相楽達先生から大学生時代の私は、「柳川君は清濁合わせ飲めるようにならなければいけないよ。」と私の**狭量さ、許容度の低さ**を直すようにというアドバイスを頂いたことがある。その後の人生の中で、私はそうなろうと意識的努力を重ねてきたが、**職業的誠実さ**の欠如だけは今なお全く許容する気持ちにはなれない。どうしても良いことに対しては私も許容度が高くなったが、本質的なことをどうしても良いとは到底思うことはできない。その意味で「三つ子の魂百まで」という諺は正しいと思われる。人間とは所詮己れの信ずる途を歩み続けるしかない生き物なのであろう。たとえ力足らずして中道に廃す（論語）としても、人生に於いて最も大切なことでは、自己の信念を曲げず妥協することを拒否して生きていきたい。それは私の強い希いであり、恩師と親友、教え子、そして家族だけでも私の気持ちを分かってくれるなら人生も捨てたものではない。

（1999年5月5日 自宅の台所にて）

## 追記

実は新年度用の新しい話として4本のストーリーをゴールデンウィーク中に書き下ろし、「さあ今年も頑張ろう」と意気込んでいた所、5月7日の授

業中に事務局教務課の方が見えられ、受講生が3名しかいないので今年は閉講するという方向でお願いできないかと私に相談されるとともに、3名の受講生には他の2単位科目を選択し直してくだらないだろうかとの依頼が教室でなされた。5月12日の合同教授会で、私の担当する日本事情Ⅰの平成11年度の閉講が正式に決定された。殆ど全学生を対象とした科目も、留学生の1年生20人を対象とした科目も、一律に5名以下の場合は閉講する（勿論超コマである場合に担当教員の了解の元にという条件付きであるが）というのはいかにも乱暴な話しであると私は思う。しかしながら受験生が急速に減少し、授業のコスト・パフォーマンスを大学当局が見直さざるをえないのだろうと忖度したことに加え、超コマは大変気の毒だと授業を1ヶ月行なった後で親切に申し入れて下さった涙がこぼれるくらい有難いそのご高配を無にすることは大変心苦しかったことと、さらに3名しか受講生を集めることのできなかった不人気教師としての私にとり、生来大変気の弱い性格でもあり、日本的和の精神を尊ぶことにおいては人後に落ちないという性格もあり「3名でも俺は授業をやるぞ」と強気に主張することは遂に不可能なことであった。

上述のような経緯から、本論文には学生を前にして一回講義してからの彼らの**反応を見て部分的に或いは全面的に加筆修正をする**という私の通常のプロセスを経ない4本の new stories が含まれることとなった。掲載を1年遅らせて来年6月に投稿するということも可能な選択肢ではあるが、次年度受講生が必ず増加するという確かな保証は何もないから、当然次年度も閉講という場合もありうることも考えて、既に原稿が出来上がっていることでもあり、本号に投稿を決意した次第である。

この文章を書いているのは6月2日で、もう5月も終わった。やりたいこと、やらねばならないことの多さに比べ、時の経つことの何と早いことか、浜崎あゆみが歌うように「**私には時間が無い**」。そして私はもはや「**疲れを知らない子供**」（小椋佳）でもない。体力も気力もそして視力も落ちた。残されたありったけのエネルギーを投入して、意志の力を奮い立たせ果たすべき役割を果たしていこう。

希望とは 意志の力で 持つものと  
五月の風が 強くささやく

(1999年 5月27日)

五月晴れ かつて羨む ボール投げ  
父となりてぞ 今日楽しまん

(1999年 5月30日)

六月の 涼風(すずかぜ) 軽く ほほにふれ  
夢は高みに なげてありしか

(1999年 6月 1 日)

(1999年 6月 2 日 自宅の台所にて)

(注1) 製品ドメインのデザインに関しては、筆者の次の研究を参照のこと。

〔1〕柳川高行、1997年、「経営戦略の理論と実証（その5）：——ケース・メソッドによる経営戦略論入門（その2）：新製品開発戦略と戦略的相補的資産の内部化——」

(注2) ストアドメイン・デザインに関しては、筆者の次の研究を参照のこと。

〔2〕柳川高行、1998年、「研究ノート ふだん着の経営学——新しい経営学入門——（その1）」、『白鷗大学論集』、第12巻第2号、105～205ページ、特に151～155ページ。

(注3) 教授者の個人的に話しておきたい individual content について、誤解を生じないように一言付言しておきたい。individual content は、いわゆる「雑談 (idle story)」とは異なる。話しの文脈との関連から触れておきたい「専門的雑談 (profession-related sub-story)」と、話しの文脈と関連しないように思われるが、人生の実体験において教授者が体



験的に掴みとってきており、学生に是非話しておきたいという「人間的眞実」を語る「人間的雑談 (human-related sub-story)」とが、individual content の中味である。

セブニーイレブンとの話の関連で、学習する構造的メカニズムを持った他の企業や個人の話に広がることを超えて、大学でのキャリア・デザイン論へと話題が広がっていくことは、profession-related sub-story の代表例である。

岡本真夜のヒット曲TOMORROW の歌詞「涙の数だけ強くなれるよ」を、実生活でどのように実践していけるのかを、経営学の用語を用いて説明することは、human-related sub-story の代表例であろう。

(注4) 日本事情のカリキュラム内容については、昭和37年の文部省通達において大まかな指針が示されただけなので、大学とそこに於ける担当者により、「様々な解釈」と「意義づけ」が試みられているが、従来の日本事情の授業報告は、日本語教師がその実施にあたっている例が多いせいか、日本語教育にかなりの比重が置かれる傾向が見られた。

そのような観点から日本語の授業とは別個に日本事情の内容を組み立て実践している報告としては、例えば次の東北大学の佐藤勢紀子氏の研究を参照されたい。

〔3〕佐藤勢紀子、1996年、「『日本事情』覚書——ウチ・ソト意識を中心に——」、『放送教育研究センター研究紀要』、第13号、193～207ページ。

さらに、次の日本事情に関する論文も合せて参照されたい。

〔4〕金田一秀穂、1991年、「日本事情の考え方」、『日本語国際センター紀要』、第1号、181～193ページ。

〔5〕松井芳和、1991年、「『日本事情』をめぐる諸問題——従来の議論と国際センターの研修から考える——」、『日本語国際センター紀要』、第1号、157～179ページ。

〔6〕金本節子、1995年、「『Cultural Studies』としてみた『日本事情』」、『茨城大学教養部紀要』、第27号、209～217ページ。

(注5) 白鷗大学図書館が、購入及び寄贈によって収集して下さった、「留学生向け教育」特に「日本語教育」に関する研究資料は、次の通りである。

〔7〕Artes Liberales (アルテス・リベラレス)

〔8〕平成3年度文部省大学教育方法 改善経費プロジェクト報告書(1991)

〔9〕広島大学留学生センター紀要

〔10〕広島大学留学生日本語教育

〔11〕講座 日本語教育

〔12〕長崎大学留学生の理念と組織化について (1992)

〔13〕日本語教育論集

〔14〕東京学芸大学附属学校研究紀要

〔15〕東北大学留学生センター紀要 (1993)

〔16〕東北大学日本語教育研究論集

(本学経営学部教授)